



ピアノは私だ
3-B

ブログ完結編

裕イサオ

静寂という、もうひとつの音

11月13日に、私は五冊目の電子書籍を上梓というほど大袈裟ではないけれど、作製した。五冊の総ページ数、1413pages。記事数が960+。削除した、ないしは未発表分も入れると1000を超えている。三年間での総計とすると、恐ろしい数字である。プロ愚とはいえ、この更新力は、表彰状ものだと思う。生きている力という意味も含めて。

その日の夜にパリで起きたことは、皆さんがご存知の通りである。

三日目ぐらいに、記事を書いた。夕刻アップして翌朝、削除した。その次の日にも記事を書いて同じことをした。その次の日、三つ目の記事を書いて、そのまま下書きにした。

この一連の作業の結論が・・・。

なにも書かない、なにも語らない、というもうひとつの言葉があったことを思い出した。

なにも書かれていない原稿用紙の方が、ずっと詩的でもありえることを、思い出したのである。

2015.11.18 Wed

私だけではなく、フランス国民、在住者の心のどこかにぼっかりと穴が開いている。虚脱感と並行して平和、平穩、平凡、変わらない日常、家族、友人の大切さを改めて噛み締めている。噛み締めながら、また、虚脱感に包まれる。心の内奥の焦点がなくなっている。彷徨っているのである。いや、だからこそ、たとえであるが、ブログを書き、コンサートをし、友人に会いに行くべきであるという論調の方々も少なくはない。テレビのインタビューで頻繁に出てくるフランス語のフレーズ。「それでも、人生は続く」。

五冊目のブログ集を纏めたその日の夜に、パリの日常が、そうではなくなった。私は、当分、記事は書けないだろうなと思ったのである。そうすると彷徨う心の焦点が、ますますぼやけてくる。コンサートも中止の方向で検討を始めた。ブログの休止も検討した。私の旧知の舞踏家からメールが入っていた。「半年間、活動を休止致します」と。会社から電話。私は、失職した。

ぼっかりと開いた空洞がどんどん大きくなっていく。そうなってくると、上記の人々の論調が説得力を持ってくる。すべての心のベクトルが負の方に向かい出す前に、正の方向へ自分自身で捻じ曲げないといけない。

村上龍の小説のタイトルに「海の向こうで戦争が始まる」というものがある。村上さんの硬質な詩力のようなものを、よく現している。私、たち、と言うべきなのかも知れない。フランスは参戦国であることを、当然にして認識させられた。しかし、戦場は、我々には、いつも海の向こう。その海の向こうでは、毎日毎日が戦争という非日常の世界である。そして、当然にしてなのかも知れない、海の向こうから報復が返ってくる。

民族間の諍いに、いわゆる大国が介入する。諸々の利権が絡んでいることは周知の事実である。グローバリゼーションという煙幕で、その実態が見えない。その煙幕の隙間から報復が返ってくる。この構図は理解はできる。しかし、その報復の仕方、これは容認することはできない。

戦争にも、私の理解ではルールがある。プロ、つまり軍隊と軍隊同士の戦いである。一般市民、しかも、無差別。これは、戦争以前の行為である。

その日から二日後、十一月十五日は春を思わせる快晴の一日だった。新芽が芽吹き出してもおかしくないような陽気の中の路肩に重なる落ち葉を私は空虚な安堵感に包まれながらじっと見た。

私は職業作家ではない。けれど、やはり語りたことは書くべきであると判断した。「ピアノは私だ」を3-Aとしたからには、3-Bへ向けて。

2015.11.19 Thu

このタイトルは、私が三年間に書き散らした、書き捲くったブロ愚のページ数である。

今日は、11月19日2015年。さきほど、印刷所で、全頁を印刷物に変換してきた。スローさんの記事の中にも出てくるのだけれど、もしかすると、我々の世代はバーチャルワールドを信用しない傾向があるのだろう。印刷物、現金、現物でないと、「残った感じ」がないのだ。

その束が私の左斜め前にある。A5版にしてもらったから、A4紙の枚数は約700。それでも厚みが8cmぐらいある。私の人生という時間の一部が、私の左斜め前に現物としてある。現金ではなく書き物の束が。前者は一切残らない体質だからこそ、この二束三文の紙の束が、私の人生の軌跡、足跡となる。

自分でというのか、どうか？ 本名の私が、芸名の裕イサオに、少し、敬意と、少し脱帽しているところが、奇妙でもある。凄い人だ、彼は、と、本名の私が頷いている。

2015.11.20 Fri

短編小説「去勢された男」

このタイトルを男としたのは、私は女性の心のメカニズムに疎いから、男と限定してみた。

私は、自信過剰、メガロマニア体質が底辺にあるから、この「去勢された男」「男たち」、これが大嫌いなのである。上司の顔色を伺う、自分がどう見られているか、どう評価されているかビクビクとする。すべての挙動言動の裏に臆病が付きまとう。自信過剰、メガロ、体育会系、ジェントルサディスト、ジェームズ・ボンド、クローズゼロ系には生きた屍なのだ。

と、若い頃にそのパワーの均衡が崩れることはなかった。しかし……。会社を辞す直前に、私は生まれて初めて「去勢感」を味わった。いや、味わったから辞した。私の目力の衰えが、自分でも歴然と見えたから怖くなったのである。

私は同じ会社に二十四年間在籍していた。重複期間もあるけれど、三人の上司、日本の本社からのそれにお仕えした。私は、大変に大切にされたし、彼らは私の体質をよく理解していた。褒め殺しに弱い体質を。一つの課を任されていた。私のやり方にだれも口を挟まなかった。毎々の労いの言葉と、定期的に飲みにも行った。私は全力で任務を全うしたつもりである。

私が会社を辞す三ヶ月前。上部層がすべて入れ替わった。ここからは、音楽に例えてみる。

以前の調性は「君に任せている。会社という譜面なんぞ無視して結構。責任は我々上部が取るから自由に判断してくれ。信頼している。経費を湯水のように使えとはいわんが、君の判断に任せる。体力的な無理はするな。部下の統率をよろしく頼む。フランスの日系企業、優秀な変圧器なしでは機能しないことを我々は掌握している。それが君なのだ」。つまり、フリージャズ。譜面なしに迅速に対応してくれ。人間相手にマニュアルは通用しない。このスタンスだったのだ。

これが、すべて逆転した。譜面通りをお願いする。会社に一匹狼はいらない。歯車であることを忘れないで欲しい。当然にして、NHK交響楽団のモーツァルトに一人だけフリージャズメンが紛れ込んだ状態になった。

もちろん、会社の方針は時代状況と共に変わっていく。それを部下に指示することも当然である。もちろん、指示する側に、パワハラ、いじめ……。そんな意識はない。そう感じるのは受けての問題である。

私には、指示に随うのか会社を辞すのか、この二つしか選択肢が残らなかった。その時の上部層内での私についての会話が耳に入った。私が裏所長と呼ばれていること。フランス人スタッフから絶大な信頼をおかれていること。だからこそ、その信頼と統率がクーデターに繋がる

リスクが高いこと。旧政権の遺物であること。絶対に彼は新しいシステムに同化はしないだろう。旧政権下での、まるでジェームズ・ボンドなのだ。

誰一人、私と直接話をする上司はいなかった。一瞬、私の年齢を考えれば自己保身の方向、つまり、新政権に随う。残留する。一ヶ月ぐらいは自主規制をしてみた。この時、初めて、生まれて初めて「上司の顔色を伺っている自分」がいることに気が付いた。しかも、その時の私の目付き。「俺は去勢されている。このままではピアノの演奏が駄目になる。裕イサオという私の分身が消えてしまう」。私は辞表を出した。上部層のにんまりする姿が脳裏を過ったけれど、こちらもジェームズの笑いを笑っていたのだ。裕イサオ有限会社社長に私は就任したのである。

私が会社を辞す最終日。私は上部層にきちんと丁寧に挨拶をして去るつもりであった。なぜか、その日だけ、皆、外でアポイント。不在なのだ。私は再度ジェームズの笑いを笑って重役室の方へウインクした。

2015.11.21 Sat

お笑いショートショート「白鳥の湖」

さっき、カミサンと近所の湖にお散歩に行ってきた。近所なのに久しぶり。

快晴、気温八度。湖の水面がきらきらと綺麗。白鳥の一群が軽い波のリズムに合わせて、いるわけではないけれど、その波のリズムと一緒にたゆたっている。小さな男の子、「ママ、大きな鴨が一杯」「良く見てごらん、鴨じゃないんじゃない？」。

ヨットを止める木製の栈橋。こちらも水面の動きと一緒に揺れている。おじさん二人が、栈橋の先端で腕組みしながら水面を見ている。もう一つの栈橋に、名彩色のアクアリングを着けた男。一瞬、ぎよっとなる。けれど、その男は横座り。おっ、オカマなの？ アクアリングはいいけれど、名彩色はちょっと現況では止めて欲しい。でも、良く見ていたら、白鳥さんたちと、横座りでお話。「ねえねえ、聞いて聞いてっ。あたしねえー、戦闘員なのよおー、でもねえー、オネエ言葉止めろって、てもねえー。ねえ、悪いけど、武器、捨ててえー、手え、上げてえー。これがね、駄目えーって、言われてもねえー。ヤダヤダあー」。

カミサンが栈橋へ急に走って行く。ころころしている割には、意外と早い。しかし、うちのカミサンは泳げない。躓いて、どぼん。俺が飛び込むしかない。と言っても、ころころしているカミサンをいくら水中と言えども抱きかかえる自信はないし、水温を考えると、その前に俺が心臓麻痺。しかし、意外に軽快。栈橋に飛び乗った。栈橋の先端で二人でじいーと水面を見た。栈橋の揺れ、当然にして脇に屯す白鳥さんたちの揺れも同じ。なんか白鳥さんの一羽と目が合った。ありゃ、ぎゃーはははははあ。おめえー、絶対よ、その目は馬鹿にしている目だよなあー、本音を言えっ、この野郎っ。作者注 うちのカミサン、デブではない。ころころね。ばしいーんっ！

人工のカヌー用の急流。寒いのに十人ぐらいがやっている。カミサンと手を繋いでしばし見る。どぼっ、波。カヌー、ごろ。裏返し。カヌーのお腹が見えているのに、乗っているやつは水中で漕いでいる。たぶん、元に戻ろうとして漕いでいるのに戻らないから、逆様の状態で漕ぎながら急流に飲まれていく。私は、げらげらげ・・・と笑っているうちに、なんとなく、俺の人生って、漫画にすると、そっくりなんじゃね？ とも笑いながら思う。

突然、私は志村けんさんの「イイヨナおじさん」に変身。

「いいよなあー、平和っ、食べな食べな」

「平和ソフトクリーム、食べな、食べな」

「平和ボケ？ いいよなあー、平和ボケ。ボケるぐらいの平和っ、いいよなあー、うんうん、食べな食べな、平和ボケ」

たぶん、先進国とか、経済大国の中で、これができる国は日本だけなのだ。

私は、これは、誇りだと思う。こんな国は「海の向こう」には存在していない。
と、「イイヨナおじさん」のメイクのまま、私は本気で思った。

2015.11.22 Sun

お笑いショートショート「英国諜報部員」

英国諜報部員、茅葺(かやぶき)ジョー。今年で五十六歳になった。かつては、凄腕諜報員として英国M6内部で名を馳せた男だ。ミッション「ゴールドフィンガー」「スペクター」「中洲より愛を込めて」「黄金の玉を持った男」「かぶりつきロワイヤル」……。

しかし、寄る年波には勝てない。五十歳を境にシニア部門へ配属された。シニア部門の日本食品課へ。つまり、梅干の成分だとか、パリのオペラ座界隈のラーメン屋の麺の量が規定に添っているのか、不正な商標はないのか、たとえば、タハカの明太子とか、トミ納豆とか、グンママのお茶とか……。とこういうのを取り締まるわけである。

段々と、筋トレは面倒になってしまったし、ワルサーPPKをホルスターから取り出すこともない。手入れも面倒になった。射撃訓練も「わんとうこっきん」を痛めているから、打つ度に「痛っ」である。さんざん、若い時分に悪さーをした報い康隆である。元々、痩せ型、あつという間に、ダニエル・クレイグの体が貧相なおっさんへ戻ってしまった。しかし、今更の筋トレ。めどうだ。

しかし、なかなか便利なものがあるもので、軽いシリコンでできた模造筋肉チョッキおよび模造筋肉パンツ、そう、お尻と太股がセクシーになるのである。これを身に纏ってから着衣。外からは筋肉隆々に見える。ますます、筋トレが面倒になるという悪循環。第一、サンタン又通りの札幌ラーメンの味噌が規定よりニグラム足りない。どっちにしろ、大して味に変わりはないのだ。調査も当然にしていい加減。とはいえ、英国諜報部員だから、予算は湯水。乗っている車は、当然にしてアストンマーチン。三ツ星レストランに出入りし、泊まりはプラザアテネである。調査内容と、やや、そぐわない。

「ジョー、新しい任務だ。スウェーデン産のにしんが不当なルートで京子食品で売られているという情報が入った。明日の夜、スウェーデン諜報部員、コードネーム金髪美女と打ち合わせ願う」M

午後六時。ジョーはプラザアテネのバーにいた。ボーイも受付のおねーさんたちも皆顔見知りである。やや、顎の線が曖昧にはなっているが、元ハンサムであるから、それなりには優雅だ。スーツの着こなしもさすがに見事である。三杯目のドライマティーニを注文した時、左側に金髪の女が立った。「刺身はなにがお好き?」。暗号だ。「にしん」。「ハイ、ジョー。あたし、キャサリン」。「ハイ、カヤブキ。ジョー・カヤブキ」。流暢な英語である。とはいえ、これぐらいはだれだって、英語が仮にしゃべれなくとも言える。むしろ、ジョーの育った東北弁の方が粋であると作者は思うのだ。だったら、そうしろよっての、作者なんだからっ！

超美形である。ここからの描写が年と共に億劫。面倒と億劫が合体したのだ。昔のショートショートと同じシリーズがあるのですが、綿密に描写しているのだ。猪狩雅彦とアリサね。読んでことねえーだろおー。ジョーの脳内に小さな志村けんが登場。

「わあ、おうおうおう」。以上である。

彼女も酒が強いらしく、シャンパンを一本空けてしまった。ジョーの方は、ドライマティーニ、八杯目。なんとなく、時間帯と流れがある。食事に誘うのが自然であろう。ホテル内にアラン・デュカスがある。ジョーは常連だから、二席ぐらいなんとでもなる。しかし、フランス料理が年と共に鬱陶しくなってきた。正直、花輪で天井食べたいよおーと思いつつ、やっぱなあー、デュカスだよなあー、この流れだとよおー、ちえっ！などと、一人呟く。作者注 どっちも高過ぎて、作者は行ったことがない。実名で書いているのに、本当に入ったのは、札幌ラーメンと京子食品のみ。大体、シャンパン、飲まん、俺は。ねえー、いちいち、作者が出てこないでっのっ！ えっえっえっ、ドストエフスキーとかミラーとかセリーヌはどうなるの？

面倒なので早回し。

二人は、プラザアテネのスイートルームにいた。全裸の上にバスローブを羽織ったキャサリン。当然にして、次の場面は決まっている。しかし、ここに重大な問題が発生した。衣類を脱げないのだよ。作者的にも。模造筋肉がばれてしまう。鬘と入れ歯は、一晩ぐらいは装着のままでもいいだろう。でも、入れ歯はポリドントの中でお休みするのが筋である。鬘も頭皮に悪い。しかも、寝ている間に、鬘がずれるリスクはある。もうこうなると、芸は身を助ける。諸々のスターの物真似。トランプマジック、メンタリスト、仕舞いには流暢な英語できみまるさんの物真似。キャサリンが眠くなるまで延々とやった。ついに、キャサリン、根負け。寝た。

やれやれと肱掛椅子に座り込み。ドライマティーニ。渋い笑いをジョーは笑った。そのまま寝込んでしまった。翌朝、鬘が床に落ちていた。慌てて被る。ぐっすり眠るキャサリン。ベッドの下に脱ぎ捨てられた下着上下。なんか妙にもっこりとしている。手に取る。げっ、シリコンパットおー。キャサリンが寝返り。化粧を取った寝顔。ブ、ブスっ！

ここで、ジョーの額に漫画の縦線と書きたいところではあるが、なんのなんの、優しい目付き。「わっ、お互い様かよおー」とキャサリンに頬キッス。なんか愛おしいのだ。

ジョーは案の定(すいませんけれど、ところどころのオジギャク、止めてもらえませんか？ なんだ、君は、作者の勝手なのじゃ。大体、若い者が、今風によっ、おじさん、おばさん風によっ、今風なあー。んて、ナウいと思って、やっとなるけんちょも、ナウいってのはね、本物のおじさん、おばさんにしかでけんのだっ。ナウで止まっちゃったのね、分かる？)、ワイシャツ、ズボン、靴下、パンツ、鬘、入れ歯を筆取り取ると、爪先立てて、胡桃割り人形を踊り出した。貧

弱な体に着けている物は、模造筋肉だけである。これが、本当の、シリコンバレーっ！ ぜえ
ぜえ、決まったっ！

2015.11.23 Mon

「裕センセ、ご無沙汰して居りました。愚ぐっとマガジン、高橋マミです」

「あっ、マミちゃん。お久しぶり」

「で、センセ。ド暇になられたとのお噂。そこで、馬鹿ショートショートの連載をお願い致しに参りました」

「えっえっえっ、ド暇？ 今晚、コンサートなんだけれど・・・」

「あっそ。お忙しいのは今晚だけなのでは？」

「どきっ。おーおー、あんた何様なの？ わしゃ、もう、ブログ、正直、ちと飽きているのだ。お小説に関しては、もじもじ。書いても書いても出版の当てがない。ふんっ、嫌だね、お断りする」

「では、ハウツーものは？」

「ものによる」

「ふふふ、編集部内部で絶対にセンセが適任といわれているテーマがあるのですよ。はい、どうしたらこれほどアクセスが少ないブログを生み出せるのか。もう、高度な技術に支えられているとしか解釈の仕様が無いのです」

「むふ、そんなに褒められると心が揺らぐねえー。うんうん。で、マミちゃんの心の準備はできているの？ ご両親にはお話したの？」

「センセ、なんか勘違いしてませんか？」

「えっ？ 高度な技術ちゅうところが琴線に触れちゃったあー。まあ、そういうことだよ、高橋君。僕はねえー、三年間、ずっと一桁読者をキープし続けてきた。多い日で9。少ない日で2。あと少しなのだ0まで・・・」

「そのノウハウを是非」

「ふひひひひ。たとえばね。そのだな、世間で盛り上がっていることは書かないわけね。たとえば、ラグビーのワールドカップとか、ジェームズ・ボンドの新作を息子と見てきたこととかね。でね、まあ、書いてもいいのだけれど、検索エンジンに引っ掛からないタイトルにするわけ。日本対南ア戦観戦日記とか、スペクターはスカイフォールを超えたかとか・・・。私的には前者のタイトルは、楯円のボールになるし、後者は筋肉質の男となる。これで検索エンジンに引っ掛からなくなるし、詩なのかエッセイなのか、なんについての記事なのか、なんだか分からないからアクセスをしようという食指が沸いてこない。それから、うーんとかくだらないか、高尚にするか、諸々の文体を駆使するから、水戸黄門を見るような感じにはならん。で、新規にたまたま任意の記事に当たる。超くだらない記事に当たれば、あまりのくだらなさにリピート意欲はなくなる。たまたま高尚な記事、パリのラーメンの構造主義的分析なあーんていうのに当たる。難解過ぎて辟易する。つまり、中間帯がないわけね。こりゃー、俺だって読まん、そんなブログ」

「センセ、その辺りのノウハウを是非是非、お願い致したく・・・」

「あらっ、そう。書きちゃっても吝かじゃねえぞ。どうして私のブログのアクセスが0になっ

たのか。いいねえー、高度な技術ねえー、孤高のブロガー、いいねえー、読者0なんだから、本物の孤高だよねえー。もう、書いちゃうっ、わたくしは高校卒業時、どん尻、びり、ブービー。一番になる奴も、そりゃー半端ではないが、このビリー・ザ・キッドも並大抵の努力では達成でけんのだっ、高橋君。試験の順位が、その学年の生徒数。こんな分かり易い順位は他にはないっ！ 一番の松本武則とは、今以て親友なのだ。ここにもメビウス現象が顕著なのだっ、高橋君っ！」

編集部 こういうお自慢って、裏でも表でもないからメビウス自慢と判断せざるを得ない

「おい、イサオ。くだらん記事書いてないで、さっさと会場に来いよっ」

「わっ、沖師匠っ！」

ポールは今、ベルリンからパリに向かっている。オリビアは子供たちにギターのレッスンをしているはずだ。ピアノ、ベース、トランペット二本というおもしろいユニットになったのだよ。真師匠は、今回は参加できないから、久しぶりのドラムレスユニット。しかも、ジャズジャイアントの二人が俺とオリビアの前にいる。因みに沖至師匠は日本フリースジャズの創始者の一人。ポール・シュビンゲンシュローグル。ベルリン在住。ギル・エバンス・オーケストラのメンバーだったのだ彼は。凄過ぎっ！ 何度も共演しているのに、後になって知るところが不思議なんだよな、

ミュージシャンの付き合いってね。ポール、超穩やかだし、自慢話なんて一切しないから、じえんじえん知らなかった。インターネットで自分で調べて、仰け反った。あっははははあー、オリビアは派手な化粧してエレクトリックベースを弾いてる写真が出て来た。ロックバンドにいたのだ、彼女は。だれも、そんな話しない。

2015.11.24 Tue

おもしろい一夜

24日は、我々の定期コンサート。ホームのジャズクラブ「バビロ」。

バビロに行く前に、何人かの仲間が出ているのは知っていたライブハウス「シャノワール(黒猫)」に行ってみることにした。

パリ広しといえども、フリージャズだのインプロビゼーションをやらせてくれるライブハウスは多くないのだ。なぜ？ お客が入らないから。多くない上にピアノがあるところが実に少ない。なんか日本人の私からすると、ちょっと不思議。ライブハウスにピアノがない？ なんか日本では考えられないし、日本ではヤマハのグランドピアノとかがある。たまにあっても、あまりに初心者用とか調律めちゃくちゃとか、鍵盤三つが動かないとか……。

なにもないところでのコンサートとなると、私のローランドのステージピアノと真師匠のドラムセットを持ち込まないといけない。当然、車になる。当然、酒を飲めなくなる。これが超つまらないから、ピアノとドラムセットのあるところと限定してしまうと、ほとんど選択肢がなくなってしまう。

「シャノワール」でビールと赤ワイン。カウンターで一人飲む。店の雰囲気と客層を観察する。五十六歳の親父がなにをして居るのだという見方もできなくはない。若い娘を物色中？ まあ、パリだから、そういう親父、すげえ多い。っても、こちとらミュージシャンだからカウンターで静かに酒を飲んでいる姿は、そこそこ格好いい。と勝手にしてしまう。飲み終わり、バーマンに「あのさ、俺ね、ピアノ弾きなんだけど、お宅でライブする時のコンタクト窓口はだれ？」「あっ、それね、バンサンちゅうのいるから、そいつにコンタクトして。メルアドさ、壁にはってあっから」「メルシ。あのさ、地下の会場、みしてくんない？」「いいよ、ミュージシャンいっと思うけど、リハだからいいよ」。

地下に下りる。高校生らしきロックバンドが諸々の機材のセッティング中。あら、トーシロー(素人)でもいいんだここは、と理解する。もちろん、音楽は万人のものだし、楽しければいいのだ、上手かろうが下手だろうが。バビロはトーシローは出演不可だけど。

わっ、ヤマハのアップライト中級があるではないか。「あのさ、そのドラム、君らの？」「いや、このだよ」「アンプは、一部は俺ら」。なんだよおー、ピアノとドラムセットとアンプがありゃー、後は、オリビアの馬鹿でか赤ちゃん＝ベース持ってきてくりゃいいわけ。さっき、コンタクトメールを入れた。

ところで、24日、私とオリビアに沖師匠の予定が、ベルリンからポールが到着。会場に、パリ

のナンバーワンサクソ奏者の一人ジェフ。もう、こうなったら皆でセッションしまおうとなった。これが超絶的に面白かった。なんか間接的に、某著名なアメリカ人女性歌手のレコーディングに裕イサオを参加させたという話が会場のどこかで出ていたらしい。

2015.11.26 Thu

送る

昨日、11月27日2015年は、13日のテロで亡くなった方々の国葬が行われた。

本日、帰宅する。私が現代美術の師と仰いだルーマニア出身の彼の永眠を留守電で知る。すでに、葬儀は終わっている。出席は永久にできない。

アブドゥーラ・ベナニの葬儀に参列して間もない。私の仲間たちが少しずつ欠けて行く。私の知らない人々まで、理不尽に欠けて行く。

送る言葉が見付からない。アブドゥーラの葬儀。私のジャズ師匠、沖至のトランペットとアメリカ人のサクソ奏者とのデュオの超絶的な美しさが脳裏を過る。あまりに美し過ぎて、涙が出てこない。生きている側への激昂なのだと思う。

送る側にいる私たちへの。

送る側がいる限り、去り行く人々は私たちの脳内で生きている。

と、頭脳内で解釈をしようとはする。けれど、とても寂しい。しかし、芸術家、芸能家・・・、競馬馬と私は理解している。走れなくなった時が終焉なのだ。センチメントとは別の世界にいることは、始める前に理解している。

私は、テロで亡くなった方々、アブドゥーラ、そして彼へ、密かに、自宅で追悼の曲を弾いた。

公の場では、私は絶対にやらない。

2015.11.28 Sat

お笑いジャズ寓話「賭場」

時は文政十八年。江戸時代のどこかのような気もするが、そんなことはどうでもいい。調べる気がない。その頃、といい加減な描写で続けるが、賭場はご法度であった。とはいえ、人間様の常。常ちゃん。ご法度系は、永遠に続くのだ。線路は続くよを歌うと気持ちがいいのだ。えっ？

時は文政十八年。田和気町。この一角、たぶん、今の世田谷辺りと思われる。ここに、堂々と賭場があったのである。なぜに、このご法度賭場がどばっとあったのか？ 以下、ご説明致そう。

「さあ——っ、はったはったっあ——、丁半っ」

江戸ナンバーワンと呼ばれる壺振り。壺田振男。あ——、めどうだねえー、登場人物の名前ねえー。

「さあ——っ、入りますっ、サイコロ二つつ」

おっ、よっ！

ばしっ、壺が開く。二つのサイコロは球形なのだ。

あっははははあ——、また、負けたあ——と皆騒ぐ。といつつ、皆、掛け金を手元に戻す。胴元の久保野御爺は、うたたねをしているのかと思ったら、ゾッキ本の老いわけの恋を読みながら、涙していた。取り締まる側の奉行所の連中まで、やあやあと入って来る。酒を飲みつつ、この光景が続くのである。

「さっ、今晚の司会を承りました玉置狭司でございます。本日は、舶来物お——、裕一茶三重奏団——！ 琴、裕一茶、琵琶、折琵琶、太鼓、佐藤真之介え——。即興楽曲う——」。

「賭場」という名の、今風に言うとジャズクラブだったのである。

2015.11.29 Sun

お笑いショートショート「哲学車」

トミタ自動車社が社運を掛けて開発した三人乗り世界戦略車「メビウス」。開発の基本コンセプトは「いつでも前進」である。ご説明致そう。

つまり、前後左右が対称形なのである。エンジンも前後に付いている。ハンドルも前後の真ん中。そう、そもそも、前後がないのだ。運転手は三席の真ん中。オートマをバックに入れると、ハンドルが引っ込み座席がくるっと回る。後ろ側からハンドル。自動的に後ろのギアが前進に入っている。後進、バックする作業がなくなる。常に、運転手、乗客は進行方向を向いていることになる。

車庫入れ。車庫の前に車を付ける。全員、くるっ。バックをするのではなく、全員進行方向。そのまま前進する。後方視界だのの問題はなくなるし、初心者でも操作がし易いのだ。たとえば、細い山道で道を間違える。ユーターンをする道幅がない。そのままくるっ、そのまま前進。わっ、モンサンミッシェルのナベットバスと同じシステムなのだ。

ここにパリでの試乗レポートをご紹介致そう。昭和リムジーン社勤務運転手裕伊茶五郎五十六歳。

なかなか、見てくれはよろしい。昔、マツダクーペという車があった。それに、ちと似ていて親近感が湧く。わくわく。しかし、ここで、苦言。我々、プロドライバー、ないし運転歴の長いドライバーはご存知の通り、車庫入れ等、バックにての車の動きの方が楽なのだ。前進しようとするのは、初心者。後方からの車庫入れの方がずっと楽。車体が大きくなる程、そうなのだ。ジャンボジェットもバックじゃねえーと倉庫に入らん。それと、トランクスペースが天井。わたくしのようにわんとうこっきを痛めているユーザーには厳しい。天井まで、トランクを持ち上げられないのである。車の重心も高くなるから、高速安定性も悪くなる。しかし、このコンセプト自体は、大変に哲学的であるとさえ思う。しかし、もう一つ、トドメの苦言。パリ名物縦列駐車……。

小刻みな前進、バックの繰り返しである。そのたんに、運転手、左右の乗客が遊園地のコーヒーカップのようにくるくる回る。いつも進行方向を向いているから、車の前後感がない。余計に難しい。どちら側から入ったのか分からなくなる。皆で、いい年こいてくるくる。ちょっと、照れる。くるくる。やっと、車を駐車した頃には目が回っているから、どちらの扉が歩道側のそれなのか分からなくなっている。しかも、扉は左右対称の観音開きであるから両手の作業。目が回ったまんま、千鳥足で、車道の方へ下りてしまう。これは、大変にきつ、危険と申し上げる。ばたっ。歩道に運転手が倒れる音。

2015.11.30 Mon

短編小説「サンラザール駅のヤマハU-1」

先日の俺たちのコンサート。俺は午前零時前にクラブを出た。北駅からでもサンラザール駅からでも、家に着く時間は変わらない。その時の気分の問題。サンラザールは、俺が会社員だった頃、通った駅だから、良く知っているし、元文学青年とすれば、ヘンリ・ミラーが恋人のモナを待っていた駅だ。頻繁に、その勝手なイメージが脳内を過る。北駅も、さらに遡る。持ち家を持つまでの会社員としての通い駅だったから、こちらも良く知っている。昔からそうだった。パリの移民の駅なのだ。移民、俺だって、ある意味、移民である。厳密には違う。俺の国籍は日本のままだ。永久にエトランジェなのだ。不思議な人、不可思議な人。いいだろう、それで。実際にそうなのだから……。

物凄くハイになったから、なんとなく北、なんとなくセリーヌの「北」という小説自体よりも、このタイトルが琴線に触れる体質だから、北駅へ向かう。着く。俺の家へ向かう電車はない。夜間工事のチェックをしなかったせいだ。慌ててサンラザールへ向かう。まだ、終電に間に合う。着く。エスカレーターを上る時、ホームの階からピアノの音が聴こえてくる。リストの曲かな？ 相当なレベルのやつだな、こんな夜中に。パリの各駅に「ご自由に、あなたの番です」という意味で、ピアノが置いてある。私はプロの端くれだから、そのシチュエーションでは演奏しない。エスカレーターを上りながら耳を澄ます。素晴らしい演奏だ。なにもの？ と思う。

ホームの階に、天井がガラス張りの巨大なホールがある。その中央のピアノ。初めて、そのピアノを遠めながら良く見てみた。定かではないがヤマハのU-1ないしはサミックの同レベルのものだと分かる。蓋の開閉のシリンダー部分で俺には分かるのだ。その前に、もちろん、音で分かるけれど、メーカーの名前までは……。

終電まで間がある。ピアノと奏者が見えるホール後方の席に座る。奏者は小柄なアラブ系の男だった。ピアノの蓋の右上に8.6というアルコール度の高い500mlの缶ビール。両手、拳。拳の裏表でピアノの鍵盤を叩いていた。しばし、見る。両手の幅、低音と高音のバランスがとてもいい。拳の使い方とてもいい。私は拍手をしようと演奏のエンディングを待っていた。男はピアノを叩きながらホールを横切るわずかな人へ、「おっ、金金っ、演奏に金くれよっ」と声を掛け始めた。私は、この時点で席を立った。

サンラザール駅のガラス天井。巨大なホール。この男。以前から、私のトリオのベース、オリビアと、どこか廃墟のようなところでデュオの演奏のビデオを作ろうと話していた。このホールはどうか？ とも思う。しかし、無差別な人々へ、一体、私はピアノでなんの演奏をするのだろうか？ 自宅で、密かに私の中のレクイエム、一つの曲を作った。タイトルは英語にしようと思う。センチメンターという。日本語だと送り主である。受け手、宛先のないという意味だ。こんな私のセンチメントの凝縮をサンラザール駅の大ホールで弾く。私には、そんな音楽テロのような行

為は絶対にできない。

2015.12.01 Tue

随筆「古い風」

追い風が老いのそれによって変わって久しい。私は初老とまではいかないが、高年という部類には入っている。一年前ぐらいまで、私は国語辞典、新聞を読む時に、老眼鏡がいらなかった。妻にいわせると、それは驚異的らしい。それが、私の若さの証のようでもあり、内心、密かに自慢していたのである。その唯一の心の拠り所が崩壊してしまった。

髪は昔から多くて固い。白髪も全体の三分の一ぐらいであるから、まあ、若い時分と視覚的にはそれほど違ってはいないであろう。ロマンズグレーという素敵な感じに近付いていると勝手に自己判断をする。しかし、すべての栄養が頭髮、または、私個人は頭脳へ行ったと解釈をしているが・・・、頭部の重要な部位、歯に至っては細部に渡る描写は差し控えたい。「女性読者を失いたく」ないからである。サクラダ・ファミリアとスペイン語でお茶を濁す。

比較的、頭部に関しては、歯を除けば目も含めて、それほど三十年前と大幅な変更点は遠目では発覚していないはずである。存在感が増したせいなのであろう。顔、体全体の輪郭が曖昧にはなった。それは、いわゆる年輪が醸し出す豊かな増長と申せよう。

若い時分から、私は頭脳明晰であり、元々、理科系であるから、世間一般でいう呆けにはならないと判断していた。物を忘れる等のケアレスミスは五十六年間、ほぼ、皆無である。百円ライターさえ、私は忘れない。几帳面なのである。眼鏡はいつも同じところに置く。置いた場所を失念し、人生の貴重な時間を探索に費やしたりはしないのだ。

四五年前、いや、五十ぐらいを堺に、たまに家族四人で夕飯を取る。夕飯時、私はかならず晩酌をしているから、そこそこに酔っている。諸々の話、とりわけ笑い話を好んです。翌日の昼食。まったく同じ口調で同じ話をする。それが、三度ぐらいになる。娘が微笑みながらも眉間に皺。「パパ、その話、昨晚聞いたよ」。妻「あなた、昨晚、まったく同じ口調で同じ話をしたわよ」。眉間にかなり深い皺。息子は「それ」については一切触れない。男子の友情と私なりには解釈しているが、気のせいかな、息子の目がやや悲しそうにも見える。しかし、友人、知人のケースは、「それ」が起こらないから不思議である。いわゆるアル中ハイマーではないと思いたい。内心の疑惑は消しきれないが・・・。

観覧車のタダ券をもらい妻が乗ろうという。私は高所恐怖症であるから受け付けない。仕方がないと妻が一人で乗る。小娘みたいにはしゃいでいる。一番下に来る。写真を撮る。小娘みたいなポーズを取り、手を振って上昇していく。観覧車を運営している一家が妻が乗った後、チケット小屋のブラインドの修理を始めた。梃子摺っている。一家四人でかなり大きなブラインドを支えているから、妻一人が乗る観覧車を停止する人間が一人もいない。延々と周り続ける。私は、腹を抱えて笑う。笑いながら、一緒になって三十年以上かと思う。愛おしさが込み上げて

来る。

2015.12.03 Thu

ミュージシャンのイメージ。そうではない方の「それ」が良く分からない。とりわけ、「フリージャズメン」とか「現代美術」「現代音楽」をやっている人たち。「現代ジャズ」とか「現代文学」、これは、なぜか、あまり、耳にしない。

私にとっては、すべて「現代の」ムーブメントであるから、「」付けをする方がおかしいと思う。

私は、詩、美術、小説、ジャズとお遍路さんの様に遍歴してきた。諸々の表現媒体を掌握したかったからである。急に、飛んでしまう。その挙句に、ブログは面白いと思うのだ。話が逸れた。

毎々、「私」で恐縮であるが……。私はフリージャズのピアノ弾きである。まあ、右上のプロフィール写真は、確かに私である。歯を食い縛ってピアノを弾いている。このイメージからすると、「情熱大陸系」「マッチョ系」「ハードライフ系」「気難しい」「煩い親父」「孤高の人」「カミサン蔑ろ」「妾一杯」「破天荒」「芸術家」「自意識過剰」「メガロマン」「自己中」「上から目線」「ナルシスト」……。

「情熱大陸」 年だから、あんま、ない。

「マッチョ」 筋肉自体が、ピアノ筋のみ。

「ハードライフ」 年だから、無理。

「気難しい」 昔は。

「煩い親父」 好々爺。

「孤高の人」 単に読者が少ない。

「カミサン蔑ろ」 私は愛妻家。

「妾一杯」 わっ、一度ぐらいいいかしらあ——。でも……。股間が……。

コカァ——んっ！

「破天荒」 私は、船酔いが駄目。

「芸術家」 だった様な気もする。十二世紀の頃。

「自意識過剰」 私は私に興味がないのです、と、デュシャン師匠がおっしゃっている。

「メガロマン」 どちらかという、メロンパンを食べたい。

「自己中」 こっちの方がしんどい。

「上から目線」 鳥瞰目線だっ！ 他人が馬鹿なら、私も含まれているのだ。

「ナルシスト」 ナルシスに申し訳ございませんっ！ もう、しませんっ！

でね、庭の草むしりが憩いの一時だったわけ。わんとうこっきを痛めてから、唯一の憩いを失ったわけ。

でね、エビ焼きそばを作るのだ、これから。

平凡、平穩、平和・・・、私は素晴らしいと思う。第一、私の故郷は、福島県いわき市の「平(たいら)」である。

2015.12.04 Fri

高年ロボ「多峰田一郎」

ここは、京東大学向学部研究室である。ここは、密かに、我々、ターミネーターの間では、良く知られた場所なのだ。ターミネーターお悩み相談および修理致します、というところなのである。ゲイバーじゃないよ。

「はぁーい、多峰田さぁーん、お入りください」と優香そっくりの研究者。

私は入る。どん、と茶山博士。ロボット研究の第一人者なのだ。ターミネーターが実在していることを知っている唯一のお方だ。

「多峰田一郎さん？ あなた、初めて？」

「はい」

「製造年は？」

「2159年です」

「あら、初期の頃の製品だね、それって」

「はい」

「で、メカの調子が悪いの？」

「人間でいう、わんとうこっきん部分に雑音と違和感、元の頭髮ゼロ、歯、ガタガタ」

「まっ、地球に来て56年だ。金属疲労だねえー、そりゃ。あなた、随分とアメリカ向けと比べると小振りね？」

「あっ、アメリカ向けの製品アーノルドのことですよ。私は日本向けでしたから、あんなにでかい必要はないし、逆に目立ち過ぎるし、金属、シリコンの量も増えますから、エコノだったのでしょね、当時は、っても未来ですけどねえー」

「で、あなたのプロセッサを分析したんだけど、珍しいねえー、あんだ、みたいの」

「急に、あんだ？」

「うん、だってさあー、あんださあー、なんかのミッションで戦闘員として来たんだろ？ でね、あんだのプロセッサには、詩、芸術、ジャズってね、女々しいプログラムのみ。のみの市だねえー、こりゃ。なんしに来たの地球ちゅうか、過去へ？」

「先生、これが問題なのです。ミッション自体のプログラムが私の場合ないのですよ。苦労しましたよ、ったく」

「ありゃ、ミッションがないの、あんだっ？ わっわっわっ、変っ、それって！ ターミネーターでしょ、あんだ、ね？」

「そうなんですよ、先生」

「なんかさあー、製造中の記憶ないの？」

「確か、私の製造者は、イーサン・ユングだったはずですよ。製造中、ランボーとかデュシャンとかミラーとかフリージャズとかぶつぶつ。わっ、また、落選えーんっ！ この野郎とか、ぶ

つぶついつてましたねえー」

「なんか、あの、馬鹿ブロガー、イサオユウに名前が似ているから、彼の子孫なんじゃね、ユングちゅう奴、な？　ということは、彼の怨念ロボなんじゃね、あんたは」

「先生、現在と未来が交差し過ぎて、なんか混乱してませんか？　で、先生。どうもねえー、機械油が切れている感じなんですよ。人並みに、マミちゅう彼女ちゅうか茶飲み友達がいるんですけど、私がロボットだつてばれるのは、ちょっと・・・」

「あらっ、あんた、下関係はどっちにしたってないでしょ？」

「わっ、それはそうですけど・・・。一応、人間らしくしてきたんだから、こっちも。で、先生、皮膚の弛みとか、最近、重い物っても8キロぐらいが限界なんですよ、ターミネーターなのに・・・」

「金属疲労だよ、あんた。大丈夫、減価償却は百年だよ、あんたは。コンクリートと一緒に」

「わっ、先生っ、永遠じゃないのですね？」

「ちょっとさあー、あんた、哀愁まで漂っているターミネーターって、本末転倒なんじゃない。ミッションもなしでしょ、あんたは」

わっ、と泣き崩れる多峰田一郎。

2015.12.06 Sun

お玉割人形

半年前ぐらいから、携帯の玉割ゲームにはまっている。同じ色の玉が三つ以上触れると割れるやつである。ご存知の方も多いと思う。

すべての画面上の玉を割るまでの使った玉数が少ないほど高得点ということになる。その数によって同じ「勝ち」でも、一つ星、二つ、三つとなる。私は、すべてのレベルを三ツ星勝利にて勝ち進むという野心の塊と化した。

プロドライバー、運転時間より、むしろ「待ち時間」が長い仕事だから、この玉割ゲームは暇潰しに丁度いいのである。元々、小説の類はほとんど読まなくなってしまったし、新聞も面倒になってしまったから、読物で時間を潰すことができなくなっている。ますます、この無心の玉割作業は素敵。二度ぐらい、あまりに夢中になり、お客様に運転席の窓を叩かれた。拙いといえば拙いけれど、そこは愛嬌。「いやあー、玉割ゲームに夢中になってましたあー、失礼致しましたあー、なかなか三ツ星勝利にならなくてえー」ぺこぺこ。「あっ、運転手さん、僕も、それ、好きですよ」。

二度ぐらい、あるレベルを制覇するのに二日ぐらい掛かった。といっても丸一日やっているわけではないけれど……。こうなると、憩いの一時がイライラの一時と化し、達成感ゼロの徒労の人と化し、なんか一日が終わっていない感じさえするのである。帰宅の電車の到着直前に制覇した時は、思わずテニスマンのようなガッツポーズまでしてしまった。本当に嬉しかったのだ。

これがレベル1377まで続いた。ところが、レベル1378、すでに一ヶ月近くが経っているのに「二ツ星勝利」のままなのだ。私の知力と技術の限界？ ということにもなる。このレベルの勝利ラインは110ぐらいが星一つ。100前後が二つ。ということは、三ツ星ラインは90と推測する。一度、87を出した。二ツ星。おっおっおっ、ということは、85以下なの？ 一度、85。二ツ星。とうとう、82。二ツ星。わっ、ということは80未満ということなのだろう。

同じレベルを何度もやっている内に、ゲームの難度が高くなっていく。出てくる玉の色の配分が、段々と物理的に勝てない方向に変わっていくのである。初期より難度が高くなっているレベルでアンダー80。これは、ほぼ、物理的に不可能なのだ。自転車で時速120キロはでない。もう、私の知力、技量の問題ではなく。物理的に不可能なのだ。

こうなると、憩いの一時であるゲームではなく、数学者の研究材料と化し、毎々、頭を掻き毟り、カミサンの声は上の空。一日中不機嫌となり、ましてや、お客様をお待ち申し上げている運転手さんという風情ではなく、運転席のインシュタイン。もう、わたくしの全知能との戦いおよび玉割の精度。ミス玉ゼロレベルへ邁進する所存でございますと悲壮感さえ漂っている今日こ

の頃、皆様、お元気でいらっしゃいますか？

娘が挑戦した。一晩だけであるが、私よりさらに理科系脳の娘がやってみて二ツ星止まり。「パパ、これ、物理的に不可能」。カミサンと娘の意見は、意地はってないで、次のレベルにいったらええ、である。「いや、パパは、嫌だね、それは」などど偏屈ジューと化している。ところで、昨日、62玉目の時だ。私の目測でミス玉がなければ、あと、15手ぐらいでいけると踏んだ。つまり、77。ついに、念願の勝利と内心の興奮を隠し切れぬ。やや、手が震える。と、その時、ブー、ゲーム終了で「負けました」の表示。このゲームに時間制限はないのである。もう、意地でも三ツ星は差し上げませんっ！ というシステムメッセージだったのかもしれない。

ふんっ、もういい、お前なんてえ！ いいもおーん、ピアノがあるもおーん。
因みに「お前の名前」は「NR Shooter レベル1378」。わっ、顔も見たくねえーっ！

注 こういう、いわゆる「凝り性」も考えもんだねえー。なんとなく、馬鹿とハサミなの、私は？ こういう時の対処法は山下洋輔大先輩のエッセイの中に出てくる。要約すると、ドイツの電車の中で、食べたい日本食を次から次へと坂田明に囁く。たとえば、とろろそば、とか。しまいに坂田先輩、本気で怒り出す。「ええーっ、やめらっしやいっー！ いや、そもそも、そういうものは当初から地球上にはなかったのだっ！ ターリラリィーン、聞く耳持たずの馬耳東風うーっ」と無理矢理の結論。

2015.12.07 Mon

ペーソスショート「ウルトラ万次郎」

寅宇万次郎はいつものように、投影テレビの「ウルトラマン」を見ていた。これも、いつものように秋田の二級酒を飲み、いかの塩辛を摘んでいた。息子の万太郎がバルタン星人と苦戦している。

「あかさん、あれ、出してくれ」

「あれ、っていわれても」

「あれ、だ。羽毛おー、衣装衣装っ！」

「衣装？ なんのですか？」

「あれ、の、だ」

「だから、なんですか、あれ、っていうのは」

「なんだっけな、コスプレ？ コスチューブ？ だから、あれ、だ。万太郎を助けに行く」

「あなた、まさか？ あれ、のこと？ もう、納戸にしまいましたよ、現役じゃないんだから・・・」

「納戸にしまった？ いつなんどきでも男子は、いつでも出勤なのだ。その、あれを納戸だと、何度いったら分かるのかっ、お前はっ！」

「はいはいはい、でも、お父さん、膝擦り切れてるし、後ろのチャック閉まらないし、肘のどこ穴開いているし・・・ねえー」

「えっ、そんなだったっけ？ いいから、出しなさいっ！」

万次郎、着る。

「お父さん、あなた筋トレ止めて、随分経ちますよ。酒煙草でよれよれ。サイズが合いませんっ」

「なんだっ、そのいいかたはっ。俺は、まだ、五十代だぞっ、粗大ゴミかってのっ！」

「はい、おっしゃる通りです」

「えっ、あまりに、きっぱり。ねえ、花子おー、もう少しオブラート、オブラート、ね。たとえ、本当だとしても、ものはいいようでしょってのっ！ おっ、このコスチューブ、重てえー、二十キロぐれーかな」

「だから、あなた、止めなさいって！ がぶがぶです」

「るっせえー、万太郎を助けに行くっ！」

「あなた、万太郎に任せなさい。今日は、少し、二日酔って今朝いったわ。大丈夫、それぐらいで、あの子はへこたれませんっ、そういう風に育てました。あたしが」

「大体、あのバルタン星人、あいつら海老なの蟹なの？ あの上から目線笑い、ふおーふおふおふお、なんだあー、あいつらっ。絶対に金のためならなんでもやる、ああいう連中は。いざっ、出勤おー。痛っ」

「あなた、スペシューム光線のポーズ、わんとうこっきん痛めているのにできるの？」

「うん、できない」

2015.12.08 Tue

宇宙の大きさ

昨日まで、COP21の仕事で忙しかった。なんか、先日、ウルトラマンのパロディーを書いたせいなのかしら、「宇宙」のことをベッドで考えた。

「宇宙の大きさ」ってなんなの？ 「無限大」という大きさってなんなの？

形とかリミットがない、つまり、「空間」。暗闇、無重力の空間。我々が観測可能な領域は、光が届く範囲。138億光年までらしい。「宇宙の果てにある天体を発見」。この天体からの光が一億年前。だから、現在の我々が観測しているのは一億年前の、その天体。光の速度については、久保の兄貴の記事の中に出て来ます。

無限大の闇に漂う地球自体が、極小の世界で、星屑、ごみ、蟻、冷蔵庫の後ろのほこり、に、さえならない。こういうところで、人間どもは、諸々と争っている。この争いの規模は、ごみ以下。

お茶の間で、我々は、一日で世界一周している。でも、これを体感しちゃったら船酔いだね。

と、結論として、なんとなく、我々は・・・、刹那？ とは、裕センセはならないのだ。

この「無限大」という観念ではなく、本当にある世界を理解、空想、想像できる我々の脳のキャパも入れ子の様に無限大なんじゃね？ だったら、もう少し、増しなことを考えようかしら、ね。

2015.12.11 Fri

親と子

昨晚、ユーチューブを弄っていたら「芸能人の二世特集」とかいう番組が出て来た。おもしろそうだったので見た。結局、そんなにおもしろくなかった。親の七光りで世に出る。もちろん、全然、構わない。でも、その親の七光りを超えるのかな？ という大きな疑問。大体、超えない。こういう子つまらない。スポーツ選手の世界は実にクリアー。実力が親を超えない、ほとんど。可哀相でもあるけれど、このシビアな世界はいいと思う。親を超え難いジャンルは結構ある。スポーツ、それからお笑いも難しい。超え易いのはモデルとかアイドルかな。

そもそも、親の七光りに乗って平気な子供たちの神経が、私には分からない。最初から自分がない。つまらない子供だ。まあ、サラリーマンも含めて、親は自分の社会的な地位を元に子供たちを、出来れば、楽に出世させたい。親心ではある。でも、余計なお世話である。そんなもんに乗っかる子供だったら、私は、最初から諦める。馬鹿じゃん、こいつ、と。

私には息子と娘がいる。徹底的な放任主義である。主義として貫いた。ほっとしているわけではなくて、放任、つまり、自分で考えて決めろという主義である。やりたいことは、やらせる。止めたいといえば、止めたい理由を聞く。理に適っていれば、オーケー。なんも、強要しない。

そして、私という多面体親父の背中を見て育った。職業不明人間のようなところがある。二十四年間もサラリーマンしていたのにである。得体が知れない。小説を黙々と書いたり、美術作品を作っていたり、物心付いたら親父はピアノと悪戦苦闘していた。彼らなりに、この親父の芸術魂みたいなものは、ひしひしと感じていたはずである。

なにもいわない、放任親父の子供たちは、私よりずっと立派に育ったし、二十六歳と二十四歳の友達なのだ。大体、娘の彼氏になんだかんだ。日本的なペーソスなのかな、こういうの。娘が選んだ人なのだから、私は口を挟まない。いいのである、自分で選んだのだから。

2015.12.12 Sat

今日で、先日のテロから一ヶ月が経った。諸々の思いが脳内を駆け巡る。私自身が失職に近い状態なのだ。しかし、遠い遠い間接的な被害である。難のこれ式理論上は、生きていく。これが最善の方法である。密かに追悼の曲「Sender」を作った。密かに、どこかで、何も言わずに、私は弾くだろう。

書きたいことが山ほどという安直な比喩以上にある。でも、どんどんアクセス数が減少している。書けば書くほど減少していく。一桁、その半分はロボット。無断掲載ブログの方が、私の読者様より多いというSF状態である。少し、めげる。でも、どうしてなのか、むしろ、私が一番知っている。それと、私と長期に渡りお付き合い頂いている方々も、その理由はご存知である。はい、そういうことです。

私は北野武の大ファンである。しかし、彼の出ている番組。周りの敬意とビビリが凄過ぎる。一視聴者からすると、あのねえー、高々、お笑い芸人なんだけれど、なんなの、そのピリピリ。気持ち分かる。私が、沖至と共演している時と同じ状況なのだ。私はペコペコしないし、ビビったりもしない。普通にしている。今出している音以外には上下関係はないからである。テレビ番組なんだから、異常だ、こういう雰囲気。これを理解して、普通にしているのは有吉弘行だけだ。彼が、間違いなくたけしさんの後継者である。徒弟関係とはそういうものである。

哀川翔さんも、私と年齢が近いせいなのか、大ファンである。めがねが良く似合う。翔さんの番組を見ていたら「師匠は長渕剛」と出て来た。長渕さんの名前は見たことがあるという程度で、それ以上はなにも知らない。なんとなく、筋肉隆々の歌手というイメージだけ。翔さんのお話を聞いていたら「俺が初めて役者やったの、長渕さんとのとんぼなんです」。「とんぼ」を見た。

私の第一印象。長渕剛っていう同姓同名の俳優さんがいるんだあー、であった。三十二歳の務所帰りのやくざという役の長渕さんの演技。きっぱりと、役者の阿部薫であった。暴力と優しさが混在した獣。あまりに凄まじい。それから、現在の彼のテレビ番組を見た。同じ人とは思えなかった。興味が湧いて来ない。私は「英二」という銀幕の向こうの寂しげな男に賞賛を惜しまない。

高年の不自然な筋肉。心と体は連動している。衰える美学もあるはずだ。むしろ、俳優なんていうどうでもいい仕事、フリージャズメンと同じだ。この衰えこそが演技の中核であって欲しいと、ピアノ弾きがおこがましくも思うのである。おっ？ 私は、まだまだあー、と裕センセは言った。「それ」こそが、衰えの第一歩なのだ。

2015.12.13 Sun

掃除狂

一日どんよりとしたお天気だと思いきや、午後から柔らかい日差し。12月なのに暖かい。家の正面の車が二台出た。急に、そういやあー、スイフトの内部、随分、掃除していないなあーと思い、家の正面へ移動。丹念に掃除機を掛け、インパネを磨き、調子付いたので窓ガラスも磨き、勢いに乗りアルミホイールも歯ブラシで磨く。もうこうなると元もとの掃除狂体質がむくむく。わんとうこっきを痛めてから階下の庭に下りていない。急に、テラスの掃除。落ち葉を集め箒で履く。夏のパラソルにビニールを掛け、半地下室にしまう。セメントと水が入ったままのバケツを洗う。スコップだの熊手だのを綺麗に並べる。

カミサンが、クリスマスツリーの飾り付けをするという。よし、その前に、飾る場所の板の間に掃除機を掛けるよと申し出る。掛け始めた。最初はサロンの右奥だけのつもりが、どうせやるならと隅々まで掛ける。止まらなくなった。結局、サロン全部を丹念に掃除した。板の間の板と板の間が気になり出し、もう一度、掃除機を掛け直す。サロン全体が綺麗になると、家具類の埃が気になり出した。電話台、ソファテーブル、サイドテーブル・・・。雑巾掛け。とりわけ、家具の二段目のマガジンラック部分の埃が気になる。こちらも雑巾掛け。こんどは、足の埃が気になる。掃除する。家具類をぴかぴかにして肱掛椅子で煙草を吸う。わっ、ピアノっ、埃だらけだあー。専用の布とワックスで磨く。ピアノ、ぴかぴか。

今度はセントラルヒーティングのラジエターの後ろの埃が気になり出した。掃除機を掛ける。宇宙空間の埃のような地球に蠢く埃はだれだ？ 私だ。今度は私が気になり出し、掃除機で吸い込んだ。綺麗なサロンが残った。

2015.12.14 Mon

脳高速「メビウス菌」

ここは、お久しぶりー、セントレイニーホスピタル。

「田所院長っ、東京都の田和気町の辺りで脳高速の患者が急増しております」

「あっそ。二年前ぐらいにもあったねえー、そういうの、ね」

「えっ、同じ状況が？」

「矢吹君、そう、日本ブログ村エッセイ部門参加者の一部がメビウス菌に侵されたことがあった。犯人は、ずはり、イーサン・ユングなのだ。謎の組織、スペクトンの主催者だっ」

「院長、ジェームズ・ボンドの見過ぎでは？」

「いやいや、矢吹君、ユングを侮ってはいかんぞおー、あやつは、音楽、ブログを通じて全世界にメビウス菌をばら撒くのだ。これに犯されると脳高速の症状が現れる。あやつは、マグマ大使のゴアに似ているという噂もある。どうでもいいけど」

「脳高速？」

「そっ、つまり、表裏がなくなるから、フリージャズ狂だの馬鹿ブログの異様な執筆、更新という顕著な症状が現れる。つまり、モーツァルトを聴いていた爺さんが、突然、なんで、わたしはこれを聴いとるのじゃ？ と、突然、変な疑問が脳内を過る。無意識に、裕イサオトリオのCDを掛けてしまう。大変、高尚なブログの愛読者が、なにか、ふとした弾みで、本当に、突然のように裕イサオのブログを覗いてしまう。と、こおーーんな感じいーー」

「あっ、それって、院長、昔、映画フィルムの中にフラッシュバックでコカコーラの宣伝がちらほらと挟まれていたちゅうのと一緒ですね。本人には見えてないのにコカコーラが飲みたくなるという現象でしたよね」

「そう、矢吹君、イーサン・ユング、別の名を裕イサオ、あやつのブログを顕微鏡で見てください」

皆さん、今日は裕イサオです。昨晚はエビ(裕イサオ)焼きそばを作りました。今晚は、久しぶりにビーフ(裕イサオ)カレーかな。そして、いつも料理をしながら、コート・ド・ローヌ(裕イサオ)の赤ワインを飲みます。そして、先日の裕イサオトリオの演奏を頂きながら聴きます(ピアノ、裕イサオ)。ベルリンからポールが来ていたので、「ハウアー裕(イサオ)?」と聞きました。「イエス、アイムファイン、アンジ裕(イサオ)」とお話しました。素敵なお話でした(裕イサオ)。今日も裕(イサオ)日がとても綺麗で、これから裕(イサオ)飯の支度。裕(イサオ)裕(イサオ)自適の毎日です。

2015.12.15 Tue

老後

いつもちゃらけた記事を「酔った勢いで」書いている。それは、もちろん、本当なのだけれど、でも、「ちゃらけ」の舞台裏は「老いへの不安」、これもかなりある。だから、若ぶってちゃらける。一種の健康法、私なりの。「老後」について考える年頃なんだろう。だって、老いの入り口へは入ったけれど、「後」は付いていない、まだ。だから、考える余裕がある。

ここ近々、カミサンと、「定年後」とか「お墓」の話をよくする。私はせっかちで几帳面だから、もう、今から、すべて準備万端にしたい。でも、カミサンは六十五歳を目処にという。うっまあー、いいだろう、それで。

たとえば、わたくし、裕センセが「遣り残したこと」とかあんのかよおーとか考えると、ない、のだ。もう、やりたいことは、すべての逆風を乗り越えてやった。だから、「悔い」なんか、まったくくない。えっえっえっ、ピアノは？ はっはっはっ、現在進行形で、どこまで行けるのか、ちゅう、人体実験だから、途中でコケたら、それはそれ、なのだ。

ふむ、わたくしに老後ってあんのかな？ でもさあー、肩も腰もわんとうこっきんも、超痛てえー。

あらっ？ そうそう、昨日、主治医のところに行った。「わんとうこっきん痛い痛いよおー」といった。コーエン先生、「あのね、痛いのは分かる。だからね、痛み止めとかは駄目なんだよ。痛いと思う動作はしないこと。以上なんだけれど・・・、あっ、車の運転は大丈夫なの？ ピアノは？」「シェンシエー、車もピアノも大丈夫だあーっ！」「おっほほほほおー、じゃ、煙草だね、そりゃ。その持つ動作が痛いだろっ！ 止めるとね、解放されるよおー、私は自由というのはこういうことだと思うよおー、傘差して、惨めに、レストランの外で、一人、煙草、惨めだねえー。わんとうこっきん痛めると、辛いねえー、その動作」。

二代目ジェームズ・ボンドそっくりのコーエン先生。粋な町医者だ。

2015.12.16 Wed

半分定年

完成している記事が下書き保存されているのに、次から次へと記事を書いてしまう。毎日、五記事なんかアップされたら、片手の指で収まってしまう貴重なご愛読者様、アップアップになってしまう。以下、徒然。

どうしてこうなのか？ 暇なのだ。会社員時代の「あの」ハードワークはなんだったの？ という感じ。昆布茶飲みながら盆栽の手入れをしているジェームズ・ボンドという風情である。元々、働き者体質、ハードワーカー、つまり、暇慣れしていないから、せかせかせかせかせか・・・、となんかやる。しかし、なんども書いたけれど、右腕のわんとうこっきを痛めてから、そのせかせかができない。ますます暇。いや、そんなに暇ではなかったのだけれど、フランスの情勢上、ほぼ、失職状態になってしまったからである。これは、勤め先の問題ではなく、同業他社も同じ状況だから如何ともしがたい。別の仕事？ 会社でシニアと呼ばれる世代に、しかも、異国の地で仕事なんぞない。

先日、カミサンのお休みの日、平日、真昼間から二人でお散歩した。「これって半分定年みたいよね」ってカミサンが言った。「はっはははははあー、本当だねえー」と二人で笑った。笑いながら、実際に定年している先輩親父たちは一体なにをして過ごしているのだろうか？ と思った。それほど、私と年齢は変わらない。この世代の人たちも私と同じ、ハードワーカーが多いから、ますます、彼ら、なにしてんだらうなあー、と思った次第である。カミサンと仲良しでないと、一人で散歩？ 家に居難い？ わっ。分からないけれど、まあ、自分の心配で手一杯である。ただ、私のケースは社会人を止めるだけで、並行してきた反社会人方面(芸術、芸能方面)の「やること」が山積している。ただ、こっちをやっても、やはり、以前のハードライフと比べると暇あ————ちゅう感じはどうしてもする。

なんとなく、昨日。空を見上げていたら、「おめえーよおー、そろそろ暇慣れしたらあー、なんかよ、俺はまだまだ現役とかさあー、わけえーもんに負けんっ、なんちゅう感じが体内で蠢いているだろ？ そろそろ、そういうの止めたら？ 半分定年でいいじゃん」と思った。なんかね、寂しいとか鬱とかじゃなくて、清々とした感じで思ったわけ。そういやあー、会社辞めた時、沖(至)師匠に「イサオもさあー、少し、暇になった方が、そろそろいいよ。お前、もう、ピアノに専念しろよ。十分、やってけるよ。お前、ずっとハードライフやってきたのに、ピアノ、折れなかったしブレなかった。凄いと思うよ、それってな。大体、旦那親父会社の偉いさんやりながらだったもんなあー、そろそろ、肩の力抜けよ」と言われたのである。

昨晚、パンツードの息子がユーチューブを見ていたら寝室に入ってきた。ラグビーマンのような筋肉隆々。わっ、そういやあー、腕相撲、いつからやらなくなったかな？ 今、やったら？ 勝ち負けではなく、きっぱり、骨折である。

因みにユーチューブで見っていたのは「マギーの暗い過去」というやつ。両親の離婚、赤貧生活、
ハーフなのでいじめに遭っていた・・・。この三つ目が気になり、息子の筋肉隆々の広い背中を
もう一度見た。

2015.12.17 Thu

謎の閲覧数

書いているばかりで、ほとんど、ブログも読まなくなりました。老眼の進行が一挙に来たせいもあるけれど、もう、二十年前ぐらいから、日経新聞以外は読まない感じになって、その、新聞も、今は読まない。といつつ、今でも、ふっと、三十五年前に日本から持ってきた詩集は読む。小説は、まったく読まなくなった。とりわけ、最近のものは。

なんか、タイトルと違うことを書いている。解析システム、FC2とグーグル。半年振りぐらいに見てみた。前者は1---5の毎日である。後者は、なんと、76なんていう日が出てくる。しかも、半分がアメリカである。こうなると、私のブログを開いて下さる方々の「実数」は、本当に不明。一体、皆さんのブログの閲覧数って何人ぐらいなのですか？

皆さんの心配をしているところではない。1---5、三年以上のアホ更新の末の数字である。

これは、あまりに惨めな数字である。もう、数記事で1000に到達するというのに・・・。

こういう時は、他人＝読まない人が悪いという判断が一番、健康にいいのだけれど、私自身がブログを読まないし、ある意味、興味は、なんか、文章の練習という感じ以外にないから、人様のことはいえない。うーん、こういう図式が自己中への道、なんだろうなあ。「自分のために書いている」。私の場合は、違う。「あなた」と「私」に書いている。ああーなあーたあーとあーわあーたあーしいー、仲良くうー、遊びましよー。大きな栗きんとんおーん。

編集部

これだもんなあー、ったく。

2015.12.18 Fri

マヒナシフト

ミュージシャン用語マヒナ=暇な、である。和田弘とマヒナスターズのマヒナはハワイ語の「月」という意味でした。私は、ずっと暇な人たちと理解していたのである。私が馬鹿だった。

自分の諸々の計画をブログ記事にするのだけれど、これは、諸、自分の覚書。読まされる側は辟易ものだと思うのでパス願いたい。

どうも、私の社会的な仕事の方は、二月末ぐらいまで復興の目処は立ちそうもない。諸々の旅行会社がリストラに入ったとのこと。それから期限付き失業の手続き。テクニカルな失職というやつ。こうなるとどうしようもない。マヒナスターの道を驀進となる。とはいえ、一日中、空を見上げているというわけにもいかないから、諸々(非生産的なことばっか)を考える。

アイム ベリーベリー マヒナ。こうなると、むっむっと「小説でも書くべえー」となる。完成作とすれば第十一作目になる。とはいえ、こちとらフリージャズメンだから、「まともな脳機能ではない」。こういう人が小説を、となると……。まず、私はストーリーテラーのオゼロである。登場人物とかお話の設定。まるっきり興味がない。私のピアノと同じなのだ。即興文みたいな感じになる。こういう小説は日本国にはない。ヘンリ・ミラーの手法である。私自身は詩小説と格好付けて呼んでいる。むっむうー、どうすっぺかなあー？ 以前からずっと考えているのは「これから書かれるであろう小説の前書きのみの小説」。前書き自体が本文だったという構造なわけ。この手法は私の発明ではない。フランスの作家たちが実験小説で使っている。小説とはなんぞやという小説。入れ子、メビウス、クライン構造。結局、小説の定義は解体されてしまう。その代わりに、人間の本质が裏返しに見えてくる。うーん、ちょっと考えよう。

昨夜、「有吉反省会」を見ていたらジャズピアニスト高木里代子という人が出て来た。ジャズ関係者がバラエティー？ 稀である。不思議なので全部見た。ピアノの実力は素晴らしい。ナレーションを聞く。「しかし、音楽業界は厳しいからエロい路線で売り出し中」。「ネグリジェ姿の演奏動画をユーチューブにアップし、おじ様方の心を掴む」。いやあー、凄い発想。第一、ジャズファンは中高年の親父だから、この路線はずばりである。なんか、アンダーグラウンドで閉塞しがちなジャズに、こういう人が現れる。楽しいったらありゃしない。ということは、私もセクシー路線？ 無理だ。いや、待てよ。性転換しておねえーになれば……。その結果、志村けんさんのひとみ婆さんがピアノ弾いているということになるわな。性転換の手術代という巨額な先行投資はどうなるのだ？ このケースは？ じーさんがばーさんになるだけで「なにも」変わらないわけだ、算数上は。いやあー、里代子さん、楽しいねえー。でも、ジャズクラブの映像、渋いベースとドラムスの親父の真ん中に水着姿のピアニスト。これは、シュールだったぜ。おもしろいけど。俺のバンドのオリビアに「ねえ、お願い」なんてバンマスの俺が言ったとする。往復

ビンタぐれえーじゃ済んだろうなあー。絶対にバックドロップだね。で、うなことは、どうでもいい。俺のバンドのジャーマネは零細企業だから俺だ。マヒナならゴトシ取って来いよっ、ばあーたれっ！ とメンバーに言われる。はずだ。元自称凄腕営業マンなのに自分の営業はからっきし駄目なわけ。でも、アイル ドゥーマイ ベストの所存です。ジャズフェスティバルなんかいいよねえー。野外の巨大ステージ。六千人のお客様。うひょひょひょー。ギャラの金額なんぞ、どうでもいいのだ。気持ちいいのだよ、この晴れ姿。なんだよおー、先日、今後は好々爺って書いてなかった？

2015.12.19 Sat

お玉割人形 2

「おりゃー、舐めとんのかいなあー。てめえー、最初の玉の色が赤だとおー」。割らなければならぬ最前列の玉の中に赤はない。

「わっ、2玉目、緑いー、ざけんじゃねえ。3玉目、青」。赤、緑、青、紫、青・・・、最前列を突破する前に割れた玉は、単に溜まった青だけである。つまり、この玉群は、すべて無駄玉としてカウントされている。アンダー80という、ほとんど不可能なスコアを出すには、最小の玉数で最前列を突破、これ以外にはない。黄色、次に銀色が最短なのだ。

「おーおー、あんちゃんよおー、娯楽だろっ？ お前よおー、ユーザーを舐めとんかいな？」と、私の脳内言語はすでに堅気ではなくなっている。遺憾ではあるが、一ヵ月半の人生を費やしている。相変わらず二ツ星勝利のままである。おまけに、難度は遥かにアップしているから、アンダー100さえ至難である。

憩いの一時、娯楽、庶民のささやかな楽しみ・・・、こういった悠久の時間をわたくしは過ごしたくやって居るのにである。あまりの仕打ちと申し上げる。この達成感ゼロはなんなのだろう。これでは、わたくしのピアノと同じになってしまう。しかし、これは良いのだ。単に己との戦いであるからして、永遠にこないであろう三ツ星勝利＝一流ピアニスト、仮に幻であってもわたくしは止めない。しかし、娯楽までこのようになってしまうと、わたくしの人生から趣味娯楽という憩いが一つもなくなってしまう。止めて頂きたい。

一瞬の疑惑が過る。もしかすると、レベル1379、つまり、次のレベルがないのではないか？ だから、ここで諦めて頂くというシステム構造なのではないのけ？ という疑惑。思い切って次のレベルに行ってみた。ある。しかも、現在梃子摺っているレベルと大違い。玉の数が超少ない。小玉ではなくデカ玉。勝てそうな雰囲気か漂っている。デカ玉がなんかとても明るくて人間らしくもみえる。ふおふおふお、一日で三ツ星勝利かしらあー。やってみた。三日経っても二ツ星のままである。ということは、レベル1378から太刀打ちできないシステムになっちょるとも解釈できる。

どうも、ユーチューブでドラマ「とんぼ」を夜な夜な見ているから、脳内口調が長渕剛になっている。

「な、あんちゃんよおー、娯楽だろ？ 娯楽にもよ、礼儀ちゅうもんがあんだろがあ、なあ」。わっ、その内、携帯の胸倉掴んで？ うなわけねえーだろってっ！

2015.12.20 Sun

この記事が、削除したものを含めると記事番号1,000である。取り立てて感慨が湧かないところが、むしろ、ブログの良いところなのだろう。垂れ流しといえ、そうかも知れない。でも、人生自体が同じことのようにも思えるから、別に構わない。

クリスマスの当日に、ブログ記事を書くのは初めてである。以前にも書いたけれど、フランスだけではないと思う、クリスマスが日本の年越しに当たる。新年の方は、そのまま新年会という感じになる。カトリックの国では、12月25日の重みは、我々、日本人の感覚とは随分と違う。

今年のクリスマス。これも、初めてである。私の家族だけで過ごしている。

私、妻、息子、娘。でも、核家族の絆の太さを、むしろ、実感している。時代の荒波の中で、皆、孤独なのだろう。唯一の砦、帰還する場所が、この縦長の木に似た家なのだ。

フランス全土が、静かである。この静けさは、当然にして、今年の二度に渡るテロによる。

暖冬の中、核家族という単位が静かに、平穏、平和を噛み締めている。

鳥の丸焼き 息子が作ったジャガイモのピューレ これも、息子が作ったマッシュルームのクリームソース それから、アイスクリームのクリスマスケーキを食べた クリスマスツリーの下
の各自の長靴の後ろに、サンタさんが諸々のものをプレゼントしてくれた 今朝、起きる 皆で騒ぐ わっ、サンタさんが諸々おー

私は、昼から赤ワインを飲みだし、夕方、ピアノを弾いた。とても静かに。バラードばかりが脳内から出てくる。そういう時は、そのままにする。弾きながら、随分、昔に見た大島渚の「戦場のメリークリスマス」を思い出した。ラストシーンの北野武の台詞が鮮明に蘇る。

2015.12.25 Fri

頭の中が小説執筆で一杯になっている。諸々の形を考える。この諸々を小説にした方が、面白いなあーと本当に思う。しかし、正直に書いてしまうと、私の小説10作品。「日本のマーケットでは」、1作を除いて、まったく出版の宛てなしであった。つまり、「商売にならない」のだ。これをどのように理解するかが鍵なのである。私はマーケットを意識して書いたりは一切しない主義であるけれど、書いても書いても「燃えるゴミ」では、こちらもしんどいのは人情である。当然にして、人間心理では、「芸能人のくだらん本を出すなら、なぜに、俺の本を作らん」と人のせいにするわけだ。とはいえ、1作はちゃんと本になっているから、ぎゃーぎゃーいえないけど。

久保の兄貴「線引きのない世界。自分を続けるだけだ」。これは本当にそうなのだ。しかし、サハラ砂漠のど真ん中での執筆。自閉症になってしまう。読み手のいない小説は燃えるゴミ。この気持ちの逆噴射を乗り越えて書けるのかが鍵なのである。

と、偉そうに、なんか「私は才能に満ち溢れているのに」という文章だ。単純に、「才能がないのだ、ちみは」という解釈も十二分にある。スローさんの記事を読ませて頂いて、急に落語の「欲耳」について書きたくなった。山下洋輔のエッセイの中に出て来た。

たとえば、もう一人のジャズピアニストがいる。自分と同等に聴こえたならば、聴いた本人は、その人の下のレベル。ご理解頂けましたか？ 凄いいーーーと思ったら、その差は本人が思っている以上。こんなもんなの？ 自分と同じレベル。わっわっわっ、いもおーーー、自分の方が多少上。

人間としての出来の上下はまったく分からない。ピアノに特化して書いてみると、そう、不思議なのだ。他の人のピアノを聴いて、うーーーん、上手いなあーーー、俺より。と思うことが段々多くなって来ている。これは、明らかに、私のレベルがかなり向上しているという証なんだろうな。

人間性？ 見てくれ？ そんなに悪い人ではないし、そんなに不細工ではないんだけどなあー、と思うということは、「欲耳理論上」、相当にいい人でハンサムなんだろうな、俺ってよっ！ なんだよー、その結論っ！ いい気なもんだね、裕センセ。

理論上は、そういう結論になる。はずだ。ぎゃ。それを書きたくて書いたわけじゃ・・・、もじもじ。

ありゃ、クリスマスのに、記事番号1, 000ですうーと書いた。わっ、この記事だったっ！ 1000はっ！ もう少し、マシな記事にしたかったけれどねえー。まあ、パチパチパチいー！ はい、国立競技場のテープを大歓声の中で・・・。ほっといてくれっ！

2015.12.27 Sun

在宅勤務

暇だ暇だと欠伸をしながら、暖冬快晴の空を見上げていたのだけれど、本日からいきなり在宅勤務となった。

お客様のご対応をせんといかんのである。それと、会社の車の管理。

暇ボケ、ジャズボケ親父に勤まるのかしら？ ね。

一日、七十件のメールに速答していた「あの親父」は、今、何処へ？ お客様のお問い合わせに二秒後に返信していた「彼」は、今、何処へ？ なんだか、懐かしいのだよねえーっても、やっぱ、現役じゃなくなっちゃったサラリーマンも、なんとなく哀愁が漂う。はい、わたくしです。

うんうん、これでいいのだ。あらあー、ピアノ弾く時間、なかったよ。

2015.12.28 Mon

「どれ？」

「それ」

「れれれれれ」

「それらし——」

「ふあふあふあ——、それみれっ！」

「どらどらどら」

「どしどしれら」

「それ、ソファーら、どっ！」

「そそそそそどっ！」

「みそしらど？」

「しらどれら」

「れど？」

「らしそられ、ど」

「どどどっ」

「どみそし、ら」

「れれれれれ———、そっ#」

「どっふあ———b」

「bbb、どれれれれっ！」

「#れっ」

「みどれっ！！！」

「あの一、裕センセ、お仕事中にブログ書き、よろしいのですか？」

「れっ？」

「在宅勤務でしょ、ねえー」

「ふあふあふあ———ふあ」

「こういうことやっているとお客様へのメール返信も、こんな感じになっちゃいませんか？」

「そみそみ、れれれ」

「大丈夫なんすか？」

「どみら、どみら」

「そろそろ、夕飯のお支度は？」

「れっ、れっ、れっ、味噌汁(る？ しらを切る)、らど——っ！」

タイトルは単なる日付。12月30日2015年。

在宅勤務をしているから、9時から夕方5時まではパソコンの前。

今朝、8時半ぐらいに台所の雨戸を開けた。朝日の綺麗なこと！ グラビア写真みたいな色。12月とは思えない。朝日を浴びる向かいの家々が実に美しい。それから、真っ青な空。冬のフランスの遅い夜明け間に、こんな美しい光景。溜息。

今年が良い年だったのか？ 私にとって、と限定してみると、良く分からない。私ぐらいの年になると、大きな変化はない。なんか健康で平穏であれば、=良い年。うん、十分であろう。そして、新年の決意。これも、特にはない。毎年、同じである。ピアノ演奏の進化、以上。確かに、ピアノの技術はかなり蓄積されて来ている。けれど、音楽、特に、なのかも知れないけれど、ジャズにはノリ、リズム、スイングと練習しても身に付かない要素が多いから、黙々とテクニクコレクションをしても、「それが、どう出てくるのか」、これが鍵になる。一步間違えると、テクニク前面芋という恐ろしい演奏になる可能性も高いから、もう、人生自体、スイングしていないといけないという厳しい掟があるのだ。と、わたくしのブログ記事が、やや、アホであっても、このような厳しい掟の中で生きているからである、というのは半分、嘘。

先日、パソコンで調べもの。どうしてなのか、その勢いで、私の小説十作目。ブログの総タイトルと同じ「ピアノは私だ」。この最終原稿を開いてしまった。十ページぐらい読んだ。そして、その無意味振りに、私自身が仰け反った！ このとんでもない、ちょっと手前味噌なのだけれど、わざと流麗な随筆文体を駆使しつつ、その内容のノンセンス振りは、凄いつ！ この原稿、二年前に集英社に送って相手にされなかったのだ。別に構わない。なんか、出版してくれるところ、もう一度、探そうと思った。これほど無意味な小説は、ジャズ菌メビウス菌に侵された脳高速人間にしか書けないのだ。これが自宅のダンボール箱へ。これは残念至極。皆、絶対に元気になるはずだ。なんちゅう、アホなのだ、この作者は？ と、全員、自分の優位がはっきりするし、わっわっわっ、こいつガイキチ(きちがい)じゃん、と、皆、安心するはずだ。反面小説になるのだ。

と、ほざき捲くった更新狂ブロガー三年目(以上)。記事も千を超えたから、裕千吉。

いやあー、本当に片手の指で収まる読者様方。毎々のお付き合い。深ぶかとお辞儀です。皆さん、良いお年をお迎え下さい。

2015.12.30 Wed

明けましておめでとうございます。

2016年も、皆様方にとって良い御年になりますこと、心からお祈り致します。
本年も、よろしく願い申し上げます。

昨年のフランス、特にパリのことを考えると気持ちが沈んでしまう。

今年、新たなる緊張が勃発しないことを祈るばかりである。

健康、平穩、平和・・・、諸々の事を考えさせられた。

フリージャズなんぞという戯言は、そういったものの上にちゃっかりと乗っているだけであるから、根底の日常が破綻してしまうと、戯言まで消えてしまう。そういった危ういものだ。でも、戯言のない世界、超絶つまらない。贅肉、いいだろうそれで。廊下のない家。一見、合理的ではある。でも、一見、そういった無駄な空間も我々は必要としている。まあ、屋根はあった方がいい。あれ？　なんか主旨が違うな？

フランスの2016年。とりわけパリは経済的な大打撃の中からのスタートである。観光業、および、そこから派生している諸々、これがフランス経済の中枢にあるから、非情に厳しい状況である。緊張感の中の不思議な静けさ。なんか、私の錯覚なのだろうか、フランス人が少し穏やかになった。親切とか笑顔が増えた気がするのだ。なんか、皆、どこかで、そういった些細なものを欲しているのだと思う。いいことである。じゃ、スマイル。

2016.01.02 Sat

見返り

元旦は二日酔いでお玉割り人形。二日は二日酔いから解放。ばしばしと新年メール。ピアノ弾き、日本語直打ちだから、凄まじいスピード。三日から、脳が平常。庭仕事をしようと思ったら雨。掃除機狂と化す。あら、そうそう、二日目、ピアノ弾き捲くり。三日目も同じである。自宅ライブ。大体、昨年末のコンサートが二回、キャンセル。諸々の諸々による。痺れる。ゴトシの壊滅の上に、これだから、痺れエイである。でね、禁則文字の調整もめどう、改行もめどう。に、なった。でね、見返りという脳内意識について書く。うで、分かりやすくすると、たとえば、俺が俺の子供たちに「とーちゃんは、ちみたちのために、がんばって来たのだっ！」という意識のこと。「だぁーら、なんなの？」となる。年長者の教え、他人になにか「施し」をすると、「いづれ返って来る」。これって、見返りを求めているっていうことだよな。「施し」という概念は、そうではなかったと申し上げる。ちょっと、難しいかしらねえー、ピアノは私だ3のBはな。あらぁー、詩神様だっ！

あのね、自己中の願い事？ うなもんは、ない。

究極の自己中、これは、大変な努力がいることを、お若いのっ、忘れるな。

だぁー——らよぉ——、努力しろって言ってんじゃないわけ。しないと決めたら、するなってことなんだけど。

という散文詩を模索し始めた。もう一度、私の原点に戻ろうというささやかな試み、なのである。

2016.01.03 Sun

現代の詩

現代詩としなかったのは、私は、そういう呼称に反対だからである。現代美術、現代音楽・・・、なんか、難解なものの形容詞のようになっていくのが嫌なのだ。これは、正直、世間と呼ばれる、なんだか分からんものの傲慢なのである。分からないものに「現代」と付けて、すべて括る。これは駄目。人間のやることに、「難解なもの」なんぞはない、と申し上げるけれど、数学という学問はちと、流石に難しい。宇宙の実態を知ることと同じというより、人間の脳への挑戦であろう。知能指数、因みにアインシュタインは180であった。因みに東京大学に受かる「最低ライン」は120である。で、現代の詩について考察するのだ。私が、自閉症のどん底に嵌り込んだ原因がこれだ。十七歳ぐらいから、頭がおかしくなった。詩のせいである。もう、四十年前である。四十年も経てば面の皮が厚くなる。その分、脳細胞は激減している、はずだ。この四十年という時空を超えて、私が同じものを書けるのか？ 書けない。まず、「これは詩です、よろしくうーーー」、もう、こういう形態だけで、読まない。短歌俳句のパワーは半端ではない。現代の詩、つまり、不定形でなにかを書く。しかも、自ら「詩」です、これっていう。

で、二秒ぐらい熟考したんだけど、結論は、私の、でも、あなたの、でも構わない。たとえば、ブログ記事自体が、それぞれの詩という結論になる。もう少し、分かりやすくすると、生きていくこと自体がそれなんだということなんだけれど、じゃ、それにプラスして、仰々しく「詩です」っていうからには、それ相当の覚悟はいる。あれっ？ たかが詩だぞってっ！ 垂れ流しでいいんじゃないの、「読み捨て詩」なあーーーんて。私のブログ記事も、そういう感じもするけんちょも、生地はいいんだよ、ちゃんと、読めば。

この記事自体が、私にとっての現「在」詩なんだけれど・・・。詩的じゃない？
あらっ、詩的ってなに？ あらっ、あんた、絡むわね。

2016.01.04 Mon

私は28歳まで、プータローだった。額縁の内装とかして身銭。当然にして貧乏だった。でも、ちゃんとした職業名はあった。「現代美術家」。この肩書きで滞在許可証を取得していたからオフィシャル。でね、間もなく57歳。リムジーンドライバーで身銭。でも、壊滅状態。だから貧乏。でも、私の職業は「ジャズピアニスト」。プロ登録しているからオフィシャル。なんかね、若い頃にシュチエーションが戻っている。この二つの狭間の二十四年間。私はフランスの日系企業の「営業統括」。なんか、分不相応だけれど、一応は勤まっていた。貧乏ではなかった。家も買ったのだ。

なんていう小説を書こうかしら？ と、脳内に小説群が蠢いている。でも、暇な時は蠢きだけで書かないのだ。忙しくなってから、急に書き出す。不思議。

リストラ親父の悲哀？ 私は自主トラ。じえんじえん、そういう感じはない。

リムジーンドライバーの悲哀？ うーん、孤独な一匹狼感はある。でも、男の悲哀ちゅう感じだな。男は皆そうだ。使い捨ての悲哀だ。いいじゃん、それで。

結局、こういう系列小説は、絶対に書けないのだ。二秒ぐらい熟考する。選択肢は二つ。ピアノ演奏の延長、フリーライティング。現代美術家の延長だと、皆さん、ご存知のバベルの塔の小説化。架空の都市を文字化するのである。どうして、脳内で二極分解しているのだろう。脳裂傷なのかしら？

と、自分のことばかり……。筆力のあるブロガーさんたちは、たぶん、一度ぐらい、「小説書いてみよう」と思ったはず。うん、書いてみたらいいと思う。私の小説で一番長いのが、原稿用紙五百枚。こんだけ、書くという、その物理的な実感は知った方がいいと思う。不出来で構わないのだ。でも、逆に詩のことを考えたりする。またまた、自分の意見でごめんなさい。

私には、長編のストーリーテリングの才脳はない。ハレーション書き散らし。ショートショート。または、建築的美術的な小説。または、長い散文詩。完結しなかった無数の習作のことを考えている。うーん、エロティシズム小説に未練がある。マンディアルグの大ファンだから、書いてみたいなあー、「海の百合」「オートバイ」。小説のバルテュス。モデルは浅野温子さんだっ！

2016.01.05 Tue

挑発力

フリージャズとかハードロック。一卵性ソーセージ。基本が「挑発すること」にある。毒を撒き散らし、平凡な暮らしにケツといい、俺は極北まで行くぜっ！ と、まあ、格好はいい。いや、格好いいのだ。で、俺はフリージャズのピアノ弾きだから、当然、そういう要素は多分にある。もじもじ・・・、あっ「た」。ところで、私は浅野温子さんの大ファン。まず、とっても綺麗だ。でも、三枚目をやると、地が出て、ますます素敵。東京の蕎麦屋の一人娘が諸出る。この超美形のべらんめえー江戸っ子。これを我々は人生のスイングと呼ぶ。俺より二歳下だった。同い年ぐれえーと思ってたんだけど・・・。でも、今でも、ありゃ、この言い方自体が失礼しましたっ！ でも、綺麗だなあー。いい感じのおばちゃん。お目に掛かりたい気もするなあー。おっ？ とところで、挑発なんだけれど、俺は跳躍もアキレス腱、腿の筋肉ぷらぷらだから、でけん。長髪はできるけれど、洗うのがめどうだし、わんとうこっきんの問題上、避けたい。痛いよ。と、挑発力の衰えは性欲と共に、風と共に去っている。わっ、でも、フリージャズ？ 不倫ジャズさえ、でけん、老いぼれに成り果てて、でけん、うなもん。しこしこね、老眼鏡掛けてね、編み物みたいにピアノの練習しているの。もう、公の場では、あたし、弾かないわ。ケツ。聴きに来なかった、あんたたちが悪いのよっ！ などど、マツコの真似。あれっ、これってさあー、散文詩のつもりなの、あんたあー、踏み殺すわよっ！

2016.01.07 Thu

今週一杯、在宅勤務および会社の車の整備管理。問い合わせ、見積もり依頼に返信、作成なあーんてやりつつ、小説のことを考えたり、ピアノの新曲のことを考えたり、勤務時間が終わりビール飲みながらピアノ練習をして、赤ワインをちびちび始めてから急にブログを書く。ピアノで脳がハイになっている上に赤ワインほろ酔い状態。翌日、記事をアップしたこと、タイトル、内容、まったく記憶にないなんていう日もある。わっ、読まされる方は堪らんっ！ 本人が書いた記憶さえない記事を読まされている。ごめんなさい。文責はどうなるのだ？ こういう

ケースは。申し訳ございません、通りすがりの酔っ払いにパソコンを乗っ取られ、勝手に記事書かれてしまいましたあーん！ 許してもらえないなあー、これじゃ。

ミュージシャンは四六時中、脳内で音が鳴り響いている。これは、本当だ。昔作ったド音痴歌付きの曲「明日になればなにかが変わるかもしれない」というのがあるのだけれど、歌詞はこれだけ。これに新しい曲を付けている。一日中、そのメロディーが脳内で蠢いている。詩人、小説家、たぶん、ブロガーも。物書きは四六時中、脳内で言葉が鳴り響いている。これも、本当だ。美術家は・・・、幸いこれは今のところ併発していない。

そう、私の脳内で音と言葉が入り乱れている。それに赤ワインパワー。最近の記事は支離滅裂だ。と久しぶりに素面で書いてみたけれど、素面でも支離滅裂？ あーんあ。

2016.01.08 Fri

金子光晴の自伝小説の中に、写しているわけではないけれど、こんな感じの文章が出てくる。

「西洋世界では、敗者の復活はない」という意味の文章。

これは、そのまま、将棋とチェスに当て嵌まる。金子さんの文章は続く、「敗者は野垂れ死に」、と書いてあった記憶がある。個人と個人のジャングル。敗者に復活の手を差し伸べる。こういうことはない、きっぱりと描写されている。パリという金子さんがいらした時代。すでに、金子さんは「人間の地獄」と描写している。詩人の思考の切れ味は凄まじいと思う。

現在のパリは、すでに地獄を乗り越えている。人間自体の存在が曖昧になっているから、金子さんのパリとは、まったく違うものになった。「敗者の復活はない」、これは同じ。

弱肉強食の「強者」とは、だれなのか、だれも分からない。

こうなると、「敗者」がだれなのかも分からないのだ。

こういう世界での「自分の老後」を時々考える。少し身震いする。私の場合は、ピアノ弾きであり続ける以外に名案が浮かんで来ないのだ。

2016.01.09 Sat

ゴッホの晩年の地であるこの村の正確な日本語表記、分からない。普段の会話発音のままにタイトルを付けた。いらっしゃった方も少なくないと思う。私の住むピサロの町から東に6キロぐらいのはずである。カミサンと自転車で良く行くのだ。

この村は、今でも美術、音楽関係者が物凄く多い。ゴッホの磁力なのかしら、と思う。ゴッホ村という芸術家の集合住宅さえある。三十人ぐらいいるはず。その集合住宅外の連中も相当いるから、百人はくだらないと思う。人口比率からしたら「芸術家」の数は異常だと思う。

この村の公共墓地に、バン・ゴッホと弟のテオのお墓がある。先ほど、カミサンとシクラメンを持って行ってきた。ゴッホのところではない。私が敬愛していたルーマニア人のお墓に。彼が亡くなって2ヵ月近くが経つ。葬儀に参列できなかった。七十六歳だった。私より、丁度、二十歳年長。

ルーマニアからの移民。現代美術家、ダニエル・ネゴ。穏やかで物静かな人だった。私は、彼のアトリエのバルコニーでピアニストデビューをしたのである。電子ピアノを、爪の間から血を流しながら弾いたのである。そのつもりではなかった。エキサイトし過ぎて、結果的に、鍵盤が血まみれになっていた。これが、ピアニスト、裕イサオの誕生なのである。同時に、彼のアトリエに、私の美術家最後の作品が展示されていた。マネキン人形、絵画、女性のワンピースの集合体。ピアニストデビューと同時に、私の美術の終焉になった。不思議なコードだと思う。

彼の作品群。「鉄の檻」「ギロチン」「防空壕」「木製のセックスマシーン」・・・、すべての作品、かなり巨大であった。生と死と性という、この永遠の三位一体を彼は視覚化し続けた。こういう人が、近所にいたのである。そして、私を大変に可愛がってくれた。そして、私は、またしても、裏切り行為。父親を裏切ったのと同じである。私の美術は終焉し、ピアニストになった。彼は裕イサオという美術家を激昂しようとしていたのに、音楽の世界へ。

諸々の期待を裏切り続ける。

彼のアパート。彼の母親と七番目の奥さん。おばあーちゃん、実に可愛らしい。東ヨーロッパの人。なんか、日本人の、東北人の私でさえ、懐かしい感じがした。いつも、きびきび笑顔。フランス語がしゃべれないのに、ひょうきんなジェスチャーで歓待してくれた。奥さんのことは、私の友人の一人であるから書かない。ルーマニア移民の知識人のパーティーに度々呼ばれた。なんとも、熱い人たちであった。でも、苦労話が一切ない。これに驚愕したのだ。いつも前向き。諸々の苦労。日本人の私には理解が難しい。彼らは、望んでフランスに来たのではないのだ。亡命なのである。私のような甘ちゃんとは違う。

ダニエル・ネゴのお墓は、ゴッホのそのの反対側にあった。シンプル。おばあちゃん、実の母親と共に永眠した。墓石におばあちゃんの陶製の写真があった。少し横向きで、ウインクをする直前の顔。私は、彼と、おばあちゃんへ合掌したのである。苦勞の連続の果てに、この写真。私自身がシャキッとなりました、おばあちゃん。

2016.01.10 Sun

最初の一行

娘の日本語の教科書に、こんな会話が出てくる。

「私は、小説を書こうとしています」

「何ページぐらいになるのですか？」

「800ページぐらいです」

「何ページ書きましたか？」

「はい、3ページ書きました」

娘とげらげら笑った。

年末年始とずっと小説が脳内で蠢いていた。いくら即興ライティングといえども、基本構想はある。ピアノの演奏と同じである。当然、これが決まらないと、最初の一音はでない。諸々の考察のピントが急にあった。タイトルも突然決まった。テーマも決まった。前作のノンセンスと真逆の重いものになる。しかし、重くしないで書くことに決めた。これは、かなりの技術を要する。私の筆力技量でどこまで行けるのか分からない。

昨夕、これまた突然のように書き出した。三行だけ。この最初の三行が脳内から振り絞られた。後は書くだけなのだ。文字としてこれが出てくるまでの時間はかなり長い。ピアノも延々と退屈な練習の繰り返しをやってしていると、突然、閃きのフレーズが指の先から搾り出される。

ちょっと、ブログはお休みしようかしら？ いや、これが分からない。並行して書きたくなるのか休筆になるのか？ 記事の更新が、もしかすると途切れ途切れ？ その時は裕センセ、昭和の文士みたいになっちゃっているはずだからご心配なく。だれも心配しない？ あらあー、心肺ゴム用でした。

アイルビー バック ベイビー。なんのこっちゃ。(とって毎日書くのが裕センセ。更新を育てる。えっ?)

2016.01.11 Mon

時間の種類

紺の着物に着替え、卓袱台に湯呑みを置いて、丸眼鏡を掛けて、さて、二十一世紀の金字塔であるべき小説を書こうとしていた。ほとんど、坂口安吾のもの真似に近似していたと思う。

うっとうしいことに、時代は昭和ではないから、勤め先からばしばしメールが入ってきた。昨日から、突然の繁忙期に突入した。小説どころではないのである。

結局、ブログの更新の滞りは、まったくもって文学的な問題ではなかったのである。

時間は、物理的には同じであるし、皆、同じのはずだ。

しかし、この小説を書く時間と、ピアノの時間、リムジーンドライバーの時間、その時間感覚は、とんでもなく違う。さすがに、小説は、まとまった時間がないと難儀である、のではなくて、結局、切羽詰って、「書きたいこと」はないということなのである。

ありゃ、小説として「これ」を書きたかったのだけれど、別に、うなもんは、急を要していない。と、ほれっ、高年の余裕だぜってなっ！ ということにしないと、錆(これ、わざと誤字ね)しいね。

2016.01.15 Fri

自然体

今日は午後から仕事。忙しいのだけれど、幸い、早朝の仕事がないので禁酒をしなくていいし、睡眠も十分なので、それほど、よれていない。来週中盤からは、ちと、しぶいだろうなあー。

さあーて、お小説と意気込んでいたのに、突然の繁忙期。別に構わんし、きびしい赤貧の冬越えを覚悟していたから、むしろ、助かる。

あたらしい小説は、久しぶりに生と死と性について平易な文体で、重くならず書こうと考えていた。書き出してみたら、やはり、予想通りである。気持ちが沈んでくる。いい年こいて、こういうことを掘り下げようとするのが気持ちが沈むのである。楽しくないのだ。それと、どこかで、うなもん、わかっとるってのっ！ リーブミーアローンっ！ と自分自身がうっとうしくなってくる。結局、書き始めると、無意味な、鼻眞目でいえば、ちょっと哲学的なお笑いのことを延々と書き始める。まっ、そういう重たいことは若い方々の新鮮な脳で考えて頂いて、高年脳は、うなもん超越してどっ、となっちゃう。それと、どうしてなのか、お笑いコントのネタになりそうなショートショートばかりが脳から溢れ出る。やはり、無理して書くものではないのである。

暇になったら、再度、書き始めるつもりなのだけれど、どうも前作、小説「ピアノは私だ」のラインにどうしてもなりそうなのだ。うーーん、五十代後半元文学青年親父の現在の脳内晴天断面図なんだろう。やっば、自然体にする。臃な不安感はあるにしても、歯痛以外に悩みがないんだからねえー。わんとうこっきんも回復の方へ向かっているし……。今更、わしゃー、こう見えてもインテリなのじゃっ！ 別に見えてる通りでいいし……。

2016.01.16 Sat

アドリブ

ジャズのもっとも大きな特徴のひとつに「アドリブ」というものがある。「これ」ができる人とできない人と非常に大雑把に分けることができる。当然にして「これ」ができない人は、ジャズメンにはならない。もちろん、できなくて構わない。

私のコンサートに、しばしば音大の学生さんたちがくる。頻繁に、「格好いいー、私もジャズやりたいんですけど、アドリブがねえー、駄目なんです。譜面ないと・・・」。どっちにしろ、ジャズメンなんかにはならないにこしたことはないから、できなくて良いのだ。

突然、「自己中」。「私は、私自身に興味がないのです」とマルセル・デュシャンは言ったのだ。これは、究極の自己中。人間のやることに興味がないと私は理解している。

譜面通りにやれば、大体、皆、同じになる。けれど、良く聴くと、まったく違う。クラシック音楽のファンの方々のご存知の通り、同じ楽曲でも、奏者の解釈、技量、その人のキャラでまったく違う。と、ジャズは、そのキャラの違いを前面に出しているから、とんでもなく同じ曲でも違う。

結局、良かれ悪しかれ、「その人」が音楽にはというより、すべてに出る。ブログなんか、それぞれのものだ。

そうすると、デュシャンのいったことは、ヘンリ・ミラーの「私はひとつの人類史なのだ」。これと、表裏をなしている。という結論になる。

えへっ、それを書きたいのではなくて、「アドリブができない」という思い込み。そんなことは絶対にないと申し上げる。だって、実社会で生きている限りアドリブの連続なのだ。うん、こういう思い込みは五歳からピアノ始めましたあーという人たちに多い。音楽は習い事とは、そもそも違う。それは、音学の方ね。だったら、現代音楽の研究をなささい。となる。

因みに、わっ、裕センセも五歳からピアノだっ！ ぎゃ。

2016.01.17 Sun

セロニアス・モンクの音感

ジャズ狂の方々は、もちろん、ご存知のセロニアス・モンク。ジャズジャイアントのひとり。ピアニスト。

彼は究極のウマヘタピアニストだろう。極論すると、ほとんどの音がミストーンにも聴こえる。筋金入り系ジャズ狂にファンが多い。玄人好みのミュージシャンなのだろう。

私はジャズメンのくせに、ほとんどジャズを聴かない。それ以前に音楽を聴かない。小説を書いたりするくせに、小説、ほとんど読まない。元現代美術家なのに美術館へもほとんど行かない。わっ、結局、作る側にいることに興味があるから、他の人の作るものに、あまり、興味がないという恐るべき自給自足自己中人間と化してしまった。

とはいえリムジーンドライバーになってから、車の中で良くジャズの専用局を聴くようになった。その結果、ほんの一部のジャズにしか反応しないことが分かった。ニューオリンズのいかにもジャズでえーすというの、じえんじえん受け付けない。ウエストコースト系も駄目。ビーバップも駄目。とりわけ、キャバレー系のジャズは拒絶反応……。結局、極論すると、マイルス・デイビス一派とジョン・コルトレーン一派、および、その影響下のミュージシャン。これにしか反応しないことが分かった。あっ、それとフリージャズの連中。まあ、これはコルトレーンの影響の発展形だから、後者にすでに属している。

セロニアス・モンクはどちらにも属していない。まあ、ジャズ界の異端児みたいな感じ？ いや、むしろ、剥き出しのジャズの原石音という方が正解かもしれない。ジャズ水を箆で濾したら、こうなりましたあーという音。私は、おもしろいなあーと思うのだけれど、音感として、あまり好きでないことが判明した。やはり、五歳からのピアノ教室＝西洋音楽の基礎が脳インプットされているせいなのだ。今更、初期化できないのだけれど、教育というもののおそろしい一面でもある。

久しぶりに、マイルス・デイビスの初期の頃のベスト曲集CDx2、6.99eurosというのを買った。車の中で聴いた。「マイファニーバレンタイン」、このタイトルからして実に素敵。マイルスのかなしいトランペットの音。ミュート音。全体にブルーなのに暗くはない。なんと素敵なことか！ モード奏法というのだけれど、音が実におしゃれ。西洋音楽の四度和声を取り入れているから、こうなる。この頃のコルトレーンの自信のない感じがおもしろい。キャノンボール・アダレーのアルトサクソが見事過ぎて、コルトレーン、ちょっと可哀相。そして、ビル・エバンスのピアノの色気はすさまじい。ジャズ、あんま聴かない方々、おっ、俺もだ！ にお薦めです。

あれ、あっそうそう、モンクね。「ラウンドミッドナイト」を急に弾こうとして、その音感がどうしても受け付けない。無理矢理やろうとしても、なんか体内で拒絶反応。すぐに、ハービー・ハンコックの「処女航海」を弾き出す。不思議です。長くなったついでに、矛盾するけれど、ルイ・アームストロングは、なんか、好きなのだ。あの声を聴いていると、「顔まで彼のそれ」に

なってしまうのだ。

2016.01.18 Mon

早朝の名月

朝から深夜まで、ずっと仕事をしていた。今日からお休みではなくて、以前に書いた「逆9時5時シフト」。早朝、仕事をして帰宅した。また、五時から仕事。日中は家にいるという怪しげな仕事をしているのでは？シフトなのだ。

睡眠不足でロビンソン・狂いソー、マリリン・朦朧、朦朧ウォークというどうでもいいオジギャグが脳内で渦巻く。お客様が後席に乗っている時だけシャキっとして、それ以外は老人と海(なんのギャグなの?)。それから、それから……。リムジーンドライバー船頭版とか、モーターボート版、自転車版、馬版……。お笑いショートショートが脳内渦巻き。ついでに、徒歩版というのまで浮かんだ。これは、単に一緒に歩いて道案内する人。くだらない？

さっき、自宅に向かう道すがら、朝と夜の入れ替わりの空を見ながら運転。本日は超快晴。西の空に、陳腐な比喩だけれど、空に張り付いた月。月面のでこぼこまで綺麗に見える。球体ではなく丸、円形。空の円形脱毛症って独り言をいい、クスクスクス。おっ、俺は太陽系におるのだっ！ 太陽と月。わっ、俺は今、地球の表面を走っているのだぞっ！ おっ、労働っていいねえー、などと、独りVサインを車内でやっている。TSF JAZZからルイ・アームストロングの歌声。段々、顔がハナ肇。

あれっ？ 日本でもさあー、フランスでもさあー、太陽ってなんで東から昇るの？ 考えようとするけれど、脳麻痺。地球の反対側なのにどうして？ 今、やっと脳内で答え。素朴な疑問に脳麻痺。反応しない。子供みたいに疑問ばかりが浮かんでくる。ずっとさあー、宙に浮かんでいたらさあー、地球って自転してんじゃん、そのまんま世界一周できねえの？ とか……。

グルメのお客様と会話。結局、私とお客様との意見が一致した。「いい素材、シンプルな調理が一番ですねえー」となった。

「ノルマンディーのシェルブールに元肉屋さんのレストランがあるんですけど、その、元肉屋があったところという意味ではなくて、その肉屋さん自身が始めたんです。メニューは、単に焼く肉と焼き加減を選ぶだけ。でっかい暖炉で炭火焼してくれるんですよ。フライドポテトとグリーンサラダは食べ放題。ここで食べた、昔、同僚が食べているのを見て、わあー、気持ち悪りいーって、聞いていた臓物の腸詰ソーセージ、アンデュイエットというのがあるんですが、ここで食べたやつ、時々、夢に出てくるくらいおいしかったんですよ。それから、好物のひとつになりました」

「そういうのが一番だねえー。聞いているだけで、うまそっ！ ねえ、運転手さん、今からさあー、そこ行ってくれる？」

「えっ、ノルマンディーのシェルブールですよ。映画で有名な」

「うん、行こう行こうっ、今からっ！ パリのどの辺？」

2016.01.25 Mon

ご近所ストレンジャー

私のやっている「リムジーンドライバー」ってなに？　そもそもリムジーンってフランスではなんのこと？　となる。単純に超大型高級車のこと。アメリカでは、長い長い高級車のこと。フランスでは、そのことをストレッチリムジーンと呼ぶ。分かり易くいえば、ベンツのSクラス。日本車でいえば、レクサスの一番でかいやつ。と、こういう車に乗っている「要人専用ドライバー」ということになる。

今日は、またまたタクシードライバーの大規模スト。「安売りハイヤーへの抗議」。これがデリケートで安売りハイヤーとリムジーンドライバーの境目が曖昧だから、我々まで標的にされてしまう。本日は会社命令で私服、およびリムジーンマークはすべて取り外し。あくまで自家用車を装う。前回、私自身が被害に遭っているからだ。生卵を車のインパネ、および私のスーツ目掛けて投げ込まれたのだ。まだ、車をひっくり返す、暴行、タイヤにナイフよりは、かなりましだけれど、なにをされるか分からないから、午前4時に起きてお客様を迎えにいった。午前7時半、すべての空港への高速の入り口がタクシーで封鎖。幸い、空港近くの展示会場への仕事だったから、遅れは致し方なし。結局、昨日は30分の行程が、今日は3時間。家に帰るのに1時間半。明日の仕事のために、社長の乗っている車と取替えなければいけない。社長と家の近所で車交換。

と、前置き。私の住む通りは小さな町の富裕層が住むところ。唯一の浮遊層の私の家の前に13,000,000円の黒いベンツが止まっている。ご近所の皆さんの首が傾いでいるのは間違いないのだ。

2016.01.26 Tue

緊張日

ところで、昨年末からコンタクトしていたライブハウス「シャノワール(黒猫)」から返信が来た。「是非、出演してくれ」とのこと。前々から、ホームハウスを二つにしようと思っていたから、グッドニュースである。これで「バビロ」と並行して定期ライブが出来るようになるはずだ。驚いたのは、ライブハウスに一度、顔を出しただけ。担当者にも会っていない。メール連絡のみでokが出る。この世界ではめずらしい。ケースによってはお百度踏んでも駄目となる。一つにはユーチューブのお蔭だ。我々の演奏を添付した。先方はアソシエーションだから、メンバーを集めて聴いてくれたらしい。それでokが出た。付き合い、ヒューマンコネクションの職人の世界みたいなこの業界では実にめずらしいのである。たとえば、「バビロ」の方。私が一人で飲みに行った。頃合を見て、「ねえー、コンサートの担当だれ?」「えっ、俺」「俺、イサオってんだけど、お宅でコンサートできない?」「お前、いつもだれとやってんの?」「沖(至)さんとか(佐藤)真さん」「ちょっと待っててプランニング持ってくる」。以上だった。私のスタイルも楽器もなにも聞かないのに、即ok。私の二人の師匠の知名度の威力は絶大である。

今日は、これから空港へ行く。通常であれば特別な仕事ではない。すべてのターミナルの入り口出口がタクシーで封鎖されている。殺気立ったタクシー運転手たち。路上でタイヤを燃やし「安売りハイヤーへ抗議するっ!」。こういう中に、私は黒い大型ベンツで行く。ほとんど自殺行為に近い。暴行、車に危害の可能性が高い。今、諸々の策を練っている。答えは出た。長期用パーキングからモノレールでお客様を迎えに行くのだ。ただし、そのパーキングへのアクセスが封鎖されていなければ、だけれど。

2016.01.27 Wed

労働マラソンマン

今日は、午後から仕事。もう、九日間休んでいない。その内の四日間は一日の勤務時間が十五時間近い。少し楽になると思いきや、翌日から逆9to5。早朝と夜。朝九時に帰宅して五時に再度仕事場へ。これは結構キツイのだ。睡眠時間が十分取れない。当然、無理矢理でもお昼寝をしなければならないのに、タクシーの大規模スト。空いているはずの日中の時間が移動だけですべて潰れてしまったから、マリリン・朦朧状態が続く。一昨日、久しぶりに七時間ぐらい寝た。やや、すっきり。しかし、黒い大型ベンツで殺気立った空港へ。痺れる。社長の仕事がキャンセル。急遽、社長宅へ迎えに行く。空港へ近付くのは危険と判断。空港手前の駅から社長がお客様を迎えに行く作戦。空港の状態を確認した社長から電話。「我々のターミナルは封鎖されていない。十分後に車を回せ」。

手前のターミナルにタクシー運転手が屯している。私の車を見て、罵声罵声罵声。通り過ぎる。包囲されたらアウトである。すばやくお客様と社長を拾い空港裏口ルートからパリへ向かう。無事に脱出成功。

最初の案は、金の鎖とか腕輪、サングラスで行く。助手席だのに縫いぐるみを置く。つまり、金持ちの元サッカー選手が自家用のベンツでニューヨークからの彼女を迎えに来た。こうしようとなった。その後、いや、本物のミュージシャンだから売れっ子ジャズメンの方が自然じゃね、となった。トランペットとパーカッションとチェット・ベイカーの写真集なんぞを助手席に……。しかし、昨日の朝、テレビで空港の状況を見た。わっ、カモフラージュでは無理だっ！ 社長から電話。「どうしよう？」「長期用パーキングからモノレールで考えているのですけれど……」「空港の敷地内だろ、それ、危険だな」「じゃ、手前の駅から電車」「おっ、俺もそれ考えてたんだ。俺の方キャンセルになったから二人で行こうよ。俺が空港へ迎えに行くから駅で待機しててよ。そうしようよ」となった。

なんとなく、アクションドラマの台詞のような感じ。内の社長百八十五センチの「元」ハンサムだから、ますます、なんか刑事ドラマの一場面みたいになった。しかし……。「わっ、社長、おしっこしたいけど……」「おっ、あっちの線路の柵の方、だれもいないよな」「そうなんですけど、先日、俺、あそこでやってたら、急にホームに電車が入ってきて……」「わっはははははあー、チンチン電車じゃん」。

といういつもの会話に戻った。因みに、わたくしはリムジーンドライバーでございますから、このような急を要する事態に備えて、使い捨てのお手拭を常備しているのでございます。

「社長、さすがに大五郎の方は、やばいですね」「僕はね、美男子だから、OOコなんかしないよ」

。これが社長と従業員の会話なんだから、楽しいねえー。

2016.01.28 Thu

謙虚なリズム

また、分かり難いタイトル。「謙虚な自己中」の方が、アクセスが増えるのだろう。私は天邪鬼だから、そういうタイトルは付けない。どっちにしても分かり難い。

ジャズの重要な要素に「リズム」がある。リズムとシンコペーションが、ほとんど、七割ぐらいのような気がする。

ジャズの教本に、「少し、皆より前に行く感じのリズムが好ましい」と出てくる。

そう、相手の出方を待ってから自己主張するのではなくて、「先に」する、ということである。そして、各自が「それ」をするから、自己主張のごった煮になる？ これがならないのだ。この「自己主張のぶつかり」が「スイング」という波に変わる。

それを、我々、ジャズメンは知っているのだ。考えてみると、物凄く「大人」なのだと思う。

2016.01.29 Fri

謙虚なリズム2

通常、ジャズのユニットでは、ピアノ、ベース、ドラムスはリズムセクションと呼ばれる。ソロ楽器ではなくて、バックのリズム隊なのである。その上にトランペット、テナーサックスというソロ楽器が加わる。これが基本形となる。現代ジャズでは、そういう構成はあまり取らない。伝説のビル・エバンストリオが、このリズムセクションをソロ楽器に変えた初めてのユニットかも知れない。とりわけ、夭折したベース奏者、スコット・ラファロ。ベースをソロ楽器に変貌させた第一人者である。その後、ベースが前面に出るスタイルが増え、悪くいうと、やや、うっとうしい演奏も多くなった。因みに、我々のベース、オリビアは、いわゆるちゃら弾きをしない。ベース本来の持ち味を良く知っている。

ジョン・コルトレーンがマイルス・デイビスのユニットにいる頃の演奏を、ラジオで随分聴いた。大スター、マイルスとキャノンボールに挟まれて、なんか自信のない感じ。こちらも、久しぶりにラジオで聴いた。コルトレーンの最高傑作のひとつ「至上の愛」。もう、演奏のレベルがまったく違う。テクニク以前に、彼の心の変質が、そのまま超絶的な演奏に変わっている。ジャズさえ超えてしまっている。

このユニットは、ご存知の通り、リズムセクションにワンホーンという構成である。このバックのリズム隊はジャズ史の最高峰のひとつである。もう、いかにもベースらしいジミー・ギャルソン。我々は駄洒落で地味・ギャルソンと呼ぶのだけれど、このいつも後ろに引っ込んだ感じのベースはすばらしいのだ。これにピアノの巨人、マッコイ・タイナー。そして、これまたドラムスの巨人、エルビン・ジョーンズ。ジミーがリズムの土台。疾走するマッコイのピアノ。そして、独特なのがエルビンのドラムス。半テンポ、出だしが遅れているように聴こえるあのリズム。なんか疾走しようとしているのに、ほんの一瞬、ブレーキが掛かっているようなリズム。諸々のドラマーが模倣を試みた。できないのである。このリズムはエルビンにしかできない。この強烈なリズム隊の上にコルトレーンの超絶的なテナーサックスが来る。このリズムのうねりは真似ができない。

音楽をなさるブロガーさんから、コメントを頂いた。返信を兼ねて我々のユニットの合わせ方について書いてみる。

調性もリズムもメロディーも一切、合わせない。あれれ？ 自己中が激突している内に、あら、不思議。ピタリと皆が合う瞬間が必ず来るのである。自己中の激突のうねりが、なんか超自我みたいなカオスへ変質する瞬間が。実社会に、このやり方を適用できるのか？ 私個人はできると考えている。

2016.01.30 Sat

五十六歳の自画像

この記事を書く前に、今朝書いたものを読み返して見た。「自己中の激突がひとつの超自我のカオスへ」と書いてある。

ふむ。私がリンクさせて頂いているブロガーさんたち。なんの、つまり、一緒になんかやっているという調性はない。でも、不思議なブロぐる文学振興会というカオスが現れているのだ。私にとっては、心の支えにさえなっている。これは、ジャムセッションなのだ。合わせていないのに、どこか、一体化している。ジャズに酷似している、と思った。

さっき、トイレの鏡で自分の顔を二秒ぐらい見た。

元ハンサム感は多少はある。でも、顔の輪郭が座布団。あれっ、自画像は絵描きの基本であった。じゃ、続けるぞっ！

目力 薄い

暴力感 これも、あんまないようで、目の三万キロ奥の方に、少しある

でへえへえ感 これが、全面を支配

はっきりと、好々爺顔に近付いている。まあ、私は元々、性格が優しいし、大人なのだ。幼少期からだぜってっ！

あらっ？ 大丈夫なの？ ジャズメンなのに？

大丈夫だっってっのっ！

お気に入りブロガーさんたちとの「往復書簡集」なんちゅうのも、出版したい気もするけれど、一匹狼、まあ、一匹羊でもいいけれど、「我々(と書いてしまったっ！)」は、徒党を組まない。から、だから、なんか、一体化感がある気がするのである。

2016.01.31 Sun

散文詩「優しい暴力」

なんか、急に「詩のようなもの」を書いてみたくなった。雨雲の下の常緑樹の揺れをみていたせいでと思う。鬱が手招きしているようにもみえる。鬱の手招きの果ては、当然にして「あちら側」への移行である。それを考えることは、「生きていること」を考察することと結果的には同じになる。さっき、歯医者で左上顎に麻酔剤を打たれた。顔の左側の神経がない。顔面麻痺とは、こういうことなのかと、激しく揺れる木々をみながら思う。老いた妻の顔を見る。一緒になって三十年以上が過ぎている。当然にして、同時に私も老いた。パリの息子のことを考える。筋肉隆々の好青年に育った。仕事に追われる娘のことを考える。手前味噌を承知で、大変な理科系美女に育った。整形などの必要はないのだ。仮に芸能人になろうとも、である。常緑樹の尋常ではない揺れが、私を鬱の方へ誘う。私のピアノが私の腕を掴む。弾けという。弾く。弾きながら、そう、私は私自身を叱責し笑い飛ばした。

2016.02.01 Mon

お笑いBIG3

昨晚、久しぶりにタモリ、たけし、さんま、お笑いBIG3の番組を見た。

タモリさん、70歳。たけしさん、69歳。さんまさん、60歳。

タモリさんとたけしさんは、元々から大ファンである。さんまさんのことは、あまり、良く知らない。なんとなく、良くしゃべる人だなあーと思っていた。少し、やかましい感じもした。最近、改めて彼のファンになった。

タモリさんはジャズメンでもあるから、デビューの頃から大ファン。筒井康隆、山下洋輔トリオとの関係も深いどころか、彼らがタモリさんのデビューのお膳立ての張本人である。タモリさんの静かなところが、お笑い芸人として実にユニーク。弟子を取ったりもしない。ある意味、孤高のお笑い芸人。芸風も、なんの前例もない独自のもの。テレビで物静かな印象を与える稀な人だ。シニカルという言葉が良く似合う。

たけしさん。優しさと毒と暴力の臭いが漂う。芸術家と呼んだ方が分かり易い感じがする。その存在感は圧倒的である。

さんまさんの番組をいくつか見てみた。まあ、トークのスピードは抜群。ゲストそっちのけで自分の話ばかりをする。この自己中司会者、実におもしろい。自分が大好きだとか本人が知っているし、大竹しのぶさんと別れ話をしている時も、横目で自分の番組を見ていたそう。もう、これだけ明るいと言いつつ自己中ですがすがしい。タモリさんが、さんまさん、番組の中も私生活も楽屋でも、いつもハイテンション。二十四時間、お笑い芸人をやっていると言っていた。このパワーはすごい。さんまさんの饒舌芸。実に口数が多いのに、そこに毒とか中傷の臭いがまったくない。これまた稀な人だ。

このお三方、久しぶりに見て、流石だと思った。

そして、自分のピアノ演奏のことを考えた。全体的にさんまさんに近い感じがする。少し、たけしさんも入っているかな？

2016.02.02 Tue

今日の午後から、またまた、四日間、仕事。

今年のフランスの冬は、暖冬、一週間ぐらい寒波、その後、暖冬、雨雨雨。以前にも書いたパリ症候群が続出したと推測する。雨+風でミニ嵐みたいな毎日。私の家のサロンは、なんども書いたけれど、ほとんど展望台のように見晴らしがいいから、常緑樹の尋常ではない揺れを見ると、少し、怖くなる。今日は、久しぶりの快晴。木々の揺れも、ちょっと春のリズム。まあ、パリだけではないのだろうけれど、やはり、冬のパリの異邦人の孤独を考えると、少し、身震いする。もう、鬱の毛布に包まっている感じだよなあー、やっべえーなあー。幸い、私は、絵描き仲間が沢山いたし、今は家族がいるし、音楽仲間がいるから、大丈夫。

今、記事の右側のアクセス解析をクリックした。たぶん、2月1日月曜日なのだろう。閲覧数ゼロである。ついでに、グーグルの方も見てみた。おっ、いつも全然数字が違うのに、この日は同じくゼロ。ふうーむ、前々からゼロになった時にブログは止めようと考えていたから、むむうーと二秒ぐらいあった。あれれ？ FC2の訪問者リストにご訪問頂いたブロガーさんたちが並んでいる。ゼロじゃねえーじゃん？ このアクセス解析の精度ってどうなっているのか分からない。

そもそも、ゼロになったら止める？ これも根拠はないのだ。そんなに気合入れる必要もないところが、ブログのいいところでもあるから、ゼロならゼロですがすがしいわけだ。営利絡みで、アクセスが百を割ったら即刻中止する。なあーんていうブログもあるんだろうけれど、私のそれは、インターネットのひそひそ話程度。なんの営利もないし、元々はピアノの宣伝を兼ねてだったような気もするけれど、それも、もはやないから、悠々自適的老いの繰言ブログと化した。と、結局、そういうところがブログのいいところなんだよなあーと再認識して、ほっほっほおーと、またまた、記事を書くのだ。やはり、これが趣味というものなんだな。自称無趣味人間。美術とピアノは、そうならない。うーん、僭越だけれども小説書く時も、やはり、違う。そうすると、庭弄りと料理とブログは趣味ということになる。わっ、ピアノ狂を、こうして中和しているわけだな。大切にしないとなあー。

どうして、美術とかピアノ、小説は趣味にならないのかといえば、それぞれのジャンルの歴史を考えているし、その上になにか独自の些細でもいいのだけれど、もうひとつの歴史を積み重ねようとしている。結果、そんな立派なものではないにしても、意識の動きがそうになっているから、ずばり、楽しくないのだ。苦行かもしれない。ピアノ、楽しくないの？ うーん、泣き笑いみたいな楽しさとかあー、ひとりサドマゾみてえーな楽しみはあるけど・・・。

されど、ブログ

午後四時半に帰宅。風呂。電球取替え。明日の準備と二日間の収入表を作成する。靴を磨く。夕飯の支度と明日のお弁当の仕込み。と、ビールを飲みながら、ちゃかちゃか。台所の洗物をしていると、カミサン帰宅。その間に、ベッドメイキングなんぞをする。やはり、私は働き者なのである。またまた、お客様からお礼メールを頂いた。当たり前のことしかしていないのに、頻繁に頂く。わっ、ドライバーの方ね。ピアノの方は、あれっ、これも、結構あるなあー。ドライバーなんだけれど、私は、ほぼ、一時間前にはいる。空き時間も、なにがあるか分からないから、いる。ほとんど、忠犬ハチ公なのだ。真面目人間。でも、お客様を舐めることは、他人を舐めることと同じと、私は理解している。

私は、それほど人間というものが好きではない。けれど、接客という業務はそういうことと理解している。

あらっ？ タイトルと違い過ぎない？

失礼致しました。どうして皆さん、ブログを書くの？

2016.02.04 Thu

金子(光晴)さん？

先日、車の中で、「左が金子光晴が住んでいたタゲール通りです」。

「えっ、金子さん？」

「詩人の金子光晴」

「知らないな」

まったく他意はないけれど、私と同年代の大企業の部長が知らないことに、少し、私自身は驚いた。萩原朔太郎は知っているだろう、読んだことはないにしても、名前は。先日、お客様との会話の中に、「僕は、マルセル・デュシャンが一番好きだな。彼で始まって、現代美術は、彼で終焉している」。ドライバーの私。「はい、彼を超えた、そうですね、コンセプト、論理的な意味で超えた人はいませんね」。密かに心の中で、「でも、裕イサオがいますよ。彼が、本物のデュシャンの子供です。チェスがピアノに代っただけで、人生自体が酷似しています」。

もし、金子光晴の詩を読んだことがない方がいらしたら、読むべし。そして、彼の人生を知った方が、たぶん、心が楽になる。苦行の果てに、実に安らかな死顔。

2016.02.08 Mon

急に美術史について書きたくなった。もしかすると美術鑑賞の一助になるかも知れない。足早に書いてみる。

宮廷画家から始まる。ダ・ビンチなんていう天才が既にいた。「自己表現」という今では当然の概念が美術の中に出現したのは、そんな昔ではない。つまり、美術は「自己表現の道具」ではなかった。これは、大変に重要なので、まず、頭に入れること。おっ、先生なの？ 「自己表現」の芽生えは、たぶん、ベラスケス、ドラクロア、ゴヤ辺りからでマネヘ。そして、初めての前衛芸術、「印象派」が生まれる。これは、チューブ絵の具の出現と合致している。宮廷のお抱え絵師から、個人としての画家が生まれる。当然にして、個人だから赤貧は覚悟しなければならなくなった。印象派を原基として、諸々の潮流が生まれる。抽象画とキュビズムへと。前者の巨人はマチス、モンドリアン、そしてポロックへ。後者、ブラックとピカソ。シュールレアリズムの出現。この辺りから、美術の大きな潮流として「自己表現からの解放」の動き。もはや、美術は自己表現のレベルではなく、ひとつの哲学論理体系へと移行する。この辺りから、「大衆との乖離」が始まる。上から目線的な書き方は知っているけれど、歴史上そうなのだ。「一般人」が付いて行けなくなったのだ。ひとつの研究機関のようになった。そして、その研究機関のアインシュタインがマルセル・デュシャンなのである。論理的に現代美術は、彼によって始まり、彼によって論理的な帰結を迎える。ほとんど、数学の世界に近似している。

マルセル・デュシャンは印象派からスタート。キュビズムへ。独自のキュビズムから論理世界へ。実に短期間で移行。

彼がダ・ビンチを敬愛していたことは、非常に私には分かり易いのだ。美術を「自己表現ではない論理科学の世界」へ、デュシャンは戻そうとしていたのだ。「階段を降りる裸体」という独自の絵画を制作する。そして、レディーメイドの概念。美術展に便器を持ち込んだ。この便器から、私たちの既成概念は崩壊した。

「既製品の工業生産された便器」、これは「芸術ではない」と大変なスキャンダルになる。しかし、デュシャンの見解は、「私は芸術とはいっていない」。つまり、「じゃ、芸術の定義はなに？」となる。便器は単なる問いなのだ。結論はない。

デュシャンの晩年のインタビューは私の座右の書である。

「解決なんかありません。そもそも、問題などないからです」。
私は、現在、フランス語を話すから、彼のいい方が良く分かる。
翻訳された日本語とは少し違う。

「死を考えますか？」という八十歳の老人への少し残酷な問いに、「もちろん、この年ですから考えますよ。でも、肉体が消滅することに、ちょっと、快感を覚えますね」「ピカソのことをどう思いますか？」「いつの時代も、大衆はスターを欲しています。彼は、その役をこなしたのです」「あなたの子供たちが沢山いますが？」「そういわれてますね。でも、私は、同じことを繰り返して、お金を儲けようとしたことはありませんよ。飽きちゃうのです、繰り返しは」「あなたは、美術の歴史を変えた」「分かりません。五十年も前に作ったものです。五十年後に評価されました」「あなたが一番質問してほしいことは？」「お元気ですか？ かな」。

日本の詩人、吉岡実のインタビューと酷似していることが、私には興味深い。

デュシャンの、たぶん、すべてのスタンスを語る一言。

「私は、大勢の人々のひとりであることを忘れたことはありません」。

ほとんど、西洋世界で、ごく普通に自然体で東洋思想を理解した最初の人なのだと思う。れっ？ 私は日本人だった？ 先を越されたあー？ 西洋世界の成熟度は、日本人が考えている以上に進んでいるのである。いや、違う、もしかすると、我々の方が進んでいたのである。と、こういう考え方もあることを、日本人は知った方が、おっ、超絶上から目線だけれど、楽じゃんって。

2016.02.09 Tue

鬱病分析

鬱病、自閉症、引き籠もり・・・、私は医者ではないから、名称の違いが分からない。大雑把に「鬱病」とする。毎々、手前の話で恐縮、ではなくて、「私」という人も、一つの症例だから書いてみる。

私の鬱病が始まったのは十八歳。重度の下ぐらいなんだろう。でも、かなり、やばい状態。半年で二十一キロ痩せたから、両親の心配の方が、さらに重度だったはずである。

二日前に家内と鬱病について話をした。突然、飛ぶけれど、家内の結論は「あなたは、自分が考えている以上に芸術家なんじゃない」であった。ふむ。私は「自称芸術家」ではないし、そこそこには人格者だし、上から目線系でもない。

若い自分の鬱がなんだったのか？ 家業を継がないという逆噴射のストレス。逆噴射しているだけで、「では、なにをやりたいのか？」。これに、自分で答えられない。結局、行き場は墓場しかなくなる。だから、死を夢見ていた。それ以外に、方途がないと思うしか、一日を送ることができないのだ。

つまり、ネガティブな事象以外、頭の中になくなる。これが「鬱病」なのだと、超絶的に当たり前のことを書いている。そうすると、論理的には、「やりたいこと」、これを見付ける以外にはなくなる。もし、墓場に行かないのであれば。また、飛ぶ。私は自殺には反対する。どうしてか？ 一行で書く。残された生きている人々の人生を破壊するからである。自殺というパフォーマンスは、テロリズムと同じなのだ。生きている人々へ日々の懺悔を強いるほど、私たちは偉くないから、究極のエー格好しいの馬鹿タレと申し上げる。

家内と色々と話をしている内に・・・。

そうかあー、そうだよな、俺さあー、ゲイジュツ以外に、「やりたいこと」ってねえーんだよな。だからさ、「それ」ができなくなると、喚きだす。会社でよおー、重責背負って部下のこととか真面目人間だから考える。人のことばかり考える。最後にぶち切れる。俺はピアノ弾きだっけな。一人にしてくれってな。ドライバー？ うん、いい感じだな、その日暮らして。音楽のライブみたいじゃん。そう、ライブ、そう、ライブ、今、生きている、だから、むむむっ、人生自体がライブ、俺はCDには興味ない、音楽はライブ。えっ、若い頃とは違う。そうだな、「やりたいこと」が山ほどあるところが、じえんじえん、違うな。そうかあー、俺ってよ、どうしようもないくらいゲイジュツかってことなの？ やっぱ、そういうことかあー。でも、あなたは、優しすぎるわね、そういう意味では。ぎょ。だあーら、二流ちゅうことか。

まあ、五十六年も生きていれば、色々あるから、そういうシーラカンスの「今」を添付する。

2016.02.11 Thu

小説家になりたい？

私はピアノ弾きのくせに小説らしきものを書いたりする。小説家を目指しているの？ と聞かれると、じえんじえんそんなことはない。もしかすると、この記事をお読みの方に目指している方がいらっしゃるかも知れない。

以前にも何度か書いたのだけれど、私は「小説」には興味がまったくない。「作家」には大変、興味があるけれど。分かり易くいえば、「言語による作品」という感じ。日本国の物書きでいうと、ほとんど該当する人がいなくなってしまう。正確には、日本の詩人たちが積み重ねて来たものに近い。

しつこいのだけれど、私には「小説家」と「作家」は違うものなのだ。フランスでは名称が「ロマンシエール」と「エクリバン」とジャンルが違うのである。

日本では、ちょっと曖昧なのだけれど、曖昧なまま「小説家」ないし「作家」になる手段は、ご存知の通り文学賞の受賞がベストとなっている。他にもいくつかあるけれど、一番の早道ということになっている。私も、十回、著名な賞に応募した。すべて落選。最終候補のノミネートもゼロ。四作目を他の出版社に送ったら千部上梓して下さった。これが、他薦で某文学賞の候補になったのだけれど、最終的には受賞者なしとなった。その文学賞の傾向とあまりに懸け離れているので、見送りとなったと連絡があった。そして、選考委員の芥川賞作家お二人から、励ましのお手紙を頂いた。

と、十五年ぐらいの間に会社員と一時期は美術家、後期はピアノ弾きと並行して小説を書いていたのだけれど、完成作十作品の内、世に出たのは一作のみ。残りは家のダンボール箱の中にある。著名な文学賞の応募者数は約二千七百名であるから、二千六百九十九人が私と同じ状態となる。これを私は「サハラ砂漠のど真ん中の文士」と呼んでいる。読者ゼロということ。

読者ゼロ執筆を延々とやっていると、脳が破壊されてしまうから、やはり、躊躇する。結局、十一作目の執筆もなんとなく後ずさる。なんか精神病になっちゃうんじゃないかね、と恐ろしくなる。しかも、高年のそれは恐ろしい。

もちろん、「才能がない」。これも一つの自己分析。それと、どうも私が書きたいもの、つまり、「言語作品」「作家」というベクトルと合致している賞自体が存在していないという現実もある。たとえば、レイモン・ルッセルの作品がなんかの賞を受賞することは考えられないのだ。ヘンリ・ミラーも同じである。わっ、才能がない上に、該当する手段がないという二重苦のサハラ砂漠文士かよおーとなる。でも、なんか書きたいのだからあー、これが。でも、ダンボール箱ばっか増えてもねえー、どうすっぺね？

えっ、「長編詩」ということにしちゃう？ うん、それも一理ありかも。フランス語で書く？
わっ、書けないのだよ、フランス語。もちろん、ベストセラーなんてことは絶対にないのだけれど、だれにも読まれないのに書くという行為自体が、すでに病的だから、ちょっと、こわい。
直接、インターネット？ うん、それも手だよなあー。三人ぐらいは読んで下さるかもなあー。
日本ブログ村の「小説」に書く手もあるか？ 慢性鬱の親父が一人展望台サロンで執筆？ 自分でこわくなるのだ。と、ブログを書いてピアノを弾く。十一月のテロの影響で、コンサートが二回キャンセルになった。痺れた。でも、間もなく再始動する。よかった。失職からも早期に脱出できた。わっ、高年親父心も複雑だねえー。

相変わらず記事が長いんだけど、エピソード。レイモン・ルッセル。わっ、彼はクラシックのピアニストだったのだ。言語実験による作品が、どうして世の注目を浴びないのか彼には理解できなかった。自己顕示欲、名声欲の塊だったらしく、結局、気が狂ってしまったのだ。恐ろしいのだ。私はヤダよ。ヘンリ・ミラー。四十歳ぐらいの時、処女作を出版社に持ち込んだ。「君には小説家の才が一欠片もない。第一、プロット(ストーリー)がないではないか」といわれる。「小説にプロットなんかいるのか？」と返事をしたとのこと。あっ、急に思い出した。稲垣タル穂。汲み取り便所に原稿をすべて捨ててしまったのだ、彼は・・・。

2016.02.12 Fri

芸術家

タイトルに「家」付けたのだけれど、そもそも、「芸術」ってなに？ という素朴な疑問が、当然にして沸いて来る。「芸術家」、もちろん、芸術をする人ということになる。私が、初めて、「そう呼ぶしかない人」にお会いしたのは福島県いわき市の画家、松田松雄である。私の最初の師匠。いつも半纏と長靴。諸々の絵画展の賞を受賞していた方である。高校生の私は遠目で見ていた。「あれが芸術家というものなのか」と。本当にそうだった。後日、お話をさせて頂く機会、もっと後日には一緒に酒も付き合ってもらった。元々は船乗りだった。絵画は独学。小名浜港に上陸した。絵画の道へ進む決心をした。ご出身は、これも、なにかのご縁である。私と同じ岩手県。お会いする度に、私が「こんにちは」という前に、すでに最新作のお話になっていた。頭の中には絵画以外にはない、とも思えるのだけれど、すばらしいエッセイを書く方で、地元の新聞等にかかれたものを読ませて頂いた。安易な比喩であることは承知しているけれど、深沢七郎の小説を読むぐらいにすさまじい光景が描かれていた。娘の文さんは小説家になった。亡くなった父親の原稿を整理し、岩手での大回顧展を機にエッセイ集として纏めたと母から聞いた。

私が美術の世界に入る直接の切っ掛けになったのは松田先生である。地元の現代美術家、吉田重信、次代を担う天才だ、彼は。彼も、同年代であり、その切っ掛けが私と同じはずである。

まもなく五十七歳になる私にとっての「芸術の定義」は、実に単純である。陳腐なくらいに単純なのだ。心が自由であること。固定観念がないこと。物欲名声欲優越感嫉妬競争という世界から解放されている人。と、「芸術」とは私にとっては、そういうことなのである。つまり、絵描き、ミュージシャン、小説家であるとは、限らないのだ。実に、身近に「芸術家」はいる。

2016.02.15 Mon

昨日まで、ドライバーの仕事が忙しかった。その割にはブログは更新している。今日から、少し暇になった。

新しい社会的な仕事が軌道に乗ってきたせいなのだろう、なんとなく脳内が初心に帰るとか原点に戻るみたいな感じになっている。そもそも、私がフランスに来た理由が「芸術」を志す、つまり、これだったから、再度、「芸術」のことを考える。

この記事のタイトル。美術は美の次に「術」。文学は「学」。はっはははあー、音楽だけ「楽」なのだよなー！ と、一人で喜んでいる場合ではないわけでもない。

ところで、最近の記事、なんかくどいし当たり前のことを書いているし、老いの繰言、釈迦に説法的になっていることは自分でも分かっているのだけれど、なんかね、自分に言い聞かせている感じがわけね。お付き合い頂いている方々へは、大きくIsao YUと前面に書かれたTシャツを進呈致そう。いらない？ うなもの？

先日、芸術は美術音楽文学だけじゃねえぞとか書いている。その通りである。まあ、こういったものの方が、若干、悟りを開き易いのかも知れない。社会的な要素がないからである。一人で木漏れ日を浴びながら籠れるという駄洒落も成立するからである。でも、しつこいけれど、たとえば、究極のコーヒーを淹れる。ラーメン、盆栽・・・、とにかく至高とか究極とか極北とか、こういったものが脳内で蠢く行為はすべて芸術に繋がっている。だから、究極のブログを目指せば、そうなる。

世間一般の誤解がある。絵とかミュージックとか小説=芸術にはならない。芸能になるケースも多い。芸能は、それはそれですばらしいものである。どちらが上とかではなくて、芸術とは違うものである。芸能は作り手と受け手が、なにかを共有しているからである。たとえば、私は元現代美術家であるけれど、こういうことをやっている人々の多くは、自己中自信過剰自己顕示欲の塊メガロマニア俺は天才だっ！ たぶん、名声欲、嫉妬の塊でもある。私自身がそうだったから断言できる。間もなく五十七歳の私の「現在の定義」と真逆であるのだ。これはすごい！ 「現在の定義」は先日書いた。「そういった諸々からの解放」である。そう、マリリンだって諸々ある。意味不明。

絵が絵画へ。それが美術へ、そして美学へ。そして、もっと遥か彼方へ。小説も同じである。なかなか文学に昇華しない。文学へ昇華し、さらにもっと彼方へ。深沢七郎の世界は、民話神話に肉薄している世界でも稀な例であると以前書いた。そういうことなのだ。金子光晴も吉岡実も石垣りんさんもそうである。私が美術の世界、小説の世界で芸術家認定している人は非常に少ない

。ただし、これはあくまで私の見解である。いいのだそれで。

れれれっ！ 音楽ねえー。芸術なのか芸能なのかどちらの要素もあるのか……。これがよく分からない。ライブだし、観客がすぐ目の前にいる。一人で木漏れ日の中で籠れない。ライブで生きている時間を共有し謳歌までしちゃう。わっははははあー、だから、唯一、「楽」がついているわけだな。「苦楽」を共にしちゃうわけだな。慢性鬱、元自閉症親父にこそ、ぴったりだっぺな。

因みに、ピアノを再開した理由の一つに、あがり症の克服があったのである。人前でお話するとか、私は一切だめだった。ましてや、ピアノの演奏。手足が震え演奏どころではなかった。これは、自意識過剰のナルシスなのである。これを自己治療したかった。自意識？ うなもんなんぼのもんじゃい。巨大な人類史の欠片なのだお前は。ナルシス？ ハンサム度、まあー、鼻屑目で10点満点の5ぐれえーだ。沖至師匠に「イサオ、100ステージやったら治るよ、それ」ってデビューの頃いわれたのである。今じゃ、ステージの上で一人漫談やっちまいたいぐらいだし、ピアノ弾きながら、たまに料理のことを考えていたり、おっ、客席右奥にマブイナオンがいるぜっ、なあーんて堂々たるものだ。

おっ、相変わらず記事なげえー。はい、私は芸術家だった。ような気がしている。今？ フリージャズのピアノ弾き。芸術家じゃなくなっちゃったの？ それは、あなたと歴史の判断に委ねようと、マルセル・デュシャンはいつている。どっちでもいいのだ。心の自由へ邁進あるのみ。それでいいのだ。さっ、久しぶりにヤノピをくんなますぞっ！ 意味不明。

2016.02.18 Thu

うーん、ジャッキー・チェンねえー、私は好きだし、いい人感が漂っている。でも、赤貧肉体貧弱でよ、顔「だけ」似ててももてないのだけれど、ほっほほほおー、ピアノ弾きだぜって！ 逆転ホームランなの？

と、昨日書いた。結局、欧米を価値基準に、もし、我々、日本人がしているのであれば、そうは問屋が卸さない。先日も書いた。むしろ、我々の方が進んでいるところも多分にある。たぶん。まあ、なんだかんだと、私はフランスに住んでいるから、どうしてもそう思う。私がハンサムだと思うのは、同郷のよしみを外しても西田俊之さんである。大体にして八頭身だの小顔だのなか目だの、美学的な根拠は最初からない。

2016.02.19 Fri

切ない気持ち

昭和四十六年。常磐炭田が閉山になった。私は小学校六年生であった。成績は一番か二番。身長は二番。運動は福島県で二番。以前に書いた、私の人生の絶頂期にあった。残りは余生ともいえる。長い長い余生である。一番二番を争ってはいなかったけれど、結果そのようになった赤坂は東京大学へ後日いった。私の負けである。私の絶頂期に炭鉱が閉山になった。人々の落胆は絶頂期の私にはまったく分からなかった。福島県いわき市の歴史は、当時は炭鉱がすべてであった。閉山の意味が絶頂期の子供には分からなかった。落胆の中、後日、私の母校となる高校が甲子園で準優勝という快挙を達成する。ほとんど、奇跡的な快挙である。もしかすると、なんか我々には想像できない波動のようなものが起きたのかも知れない。「小さな大投手」といわれた田村投手は、甲子園の決勝まで、なんと失点一である。奇跡的な数値だ。野村捕手の父親は私の父と同業者である。心が打ち震えた。あそこまでいけるのだ、その気になれば。私も野球に夢中になった。たぶん、その頃から、家業を継がないという方向が、心の片隅に芽生えていたのだと思う。結局、一級先輩たちが甲子園の二回戦で敗れた。私は、中学生時代に、その投手の玉をブルペンで受けていた。高校進学後、野球部への入部は断念するしかなかった。勉強が疎かになるという理由である。

昭和四十八年。ブルース・リーの「燃えよドラゴン」が封切りされた。どうして、中学二年生の私がひとりで、それを見にいったのか記憶にない。平の飲み屋街の映画館。トイレに精液の臭いが充満していた。紫煙でスクリーンがよく見えない。どうして、そこにいたのか分からない。衝撃だった。ブルースの肉体、スピード。そして、当時の私には夢物語、ハリウッドのスター。身長が私と同じ中国人がハリウッドのスターになる。心が打ち震えた。奇跡的だと思えた。しかし、奇跡なんぞではないブルースの筋肉がすべてを物語っている。この鋼のようなではなく鋼そのものの筋肉なんぞ、凡人には到底無理なのである。ブルースの映画をなんども見る。彼の歴史を思う。異国で生きてきた同じ東洋人の筋肉の様相が、そのまま、その険しさを象徴している。とても切ない。

2016.02.20 Sat

現代美術の原基は、このブログにもなんども書いているマルセル・デュシャン。では、近代美術のそれは？ 美術史にくわしい方はご存知の通り、ポール・セザンヌである。どうしてなのか？

結論から書いてしまうと、「絵画に初めて平面という概念をもたらした人」だから。セザンヌ以前の画家の意識は額縁で縁取られた平面の中に、遠近法を用いて三次元世界を作り出すことだった。基本的に写実具象の世界。カメラの発明とチューブ絵の具の出現から画家の意識が変わり始める。

セザンヌの絵をご覧になると分かる通り、「画面構成のためならデフォルメする」。有名な青年の絵の左腕が異様に長いことはよく知られている。彼の意識の中で、写実するということが少しずつ消えて行っている。画面構成という平面世界でなにができるのかの模索の始まりだったのだ。セザンヌから、二つの大きな潮流が生まれる。キュビズムとフォービズムである。そして、アンドレ・ブルトンによるシュールレアリズムの登場。近代美術の骨格が形成された。これらを土台に、抽象画、幾何学へと美術は発展して行く。

セザンヌによって絵画が平面、二次元世界へ。しかし、まだ、この時点では額縁の中での作業であった。これが後年、とうとうジャクソン・ポロックによってオールオーバーの世界へ移行する。絵画は任意に切り取られた、たまたまそのサイズに切り取られた無限大の世界へと。ポロックの作品には、もはや、額縁の概念がなくなっている。

この間、半世紀近い間、マルセル・デュシャンの評価はあまりされなかった。六十年代のポップアート、ヌーボーレアリズムの台頭。歴史を紐解くと、すでに五十年前にマルセル・デュシャンが基礎コンセプトを構築していた。とうぜん、皆、驚き再評価となった。

諸々の潮流に、なんとなく大雑把に括ってしまうのだけれど、たとえば、印象派の巨人はご存知の通りモネである。彼が、一番、基本コンセプトに近い。ピサロもそうである。それと後期印象派のスーラは、それを科学的に行おうとしたユニークな画家である。セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン。私には印象派とは違うものに見える。今回は詳しくは書かない。キュビズムの巨人はブラック。フォービズムはマチス。抽象絵画の極北はモンドリアン。ポロック、ロスコーと続いて行く。

シュールレアリズムは、文学潮流の要素がつよい。個性的なメンバーはご存知の通りである。ダリのアナクロニズムは実にユニークである。古典絵画の技法に精通していた。写実の世界へ絵画を戻してしまった。ただし、写真では撮れない写実の世界へ。マックス・エルンスト。初めての個展が五十代。現代と時間の流れが違う感じがする。七十歳ぐらいの時のあたらしい彼女との写真。エルンストの色気は尋常ではない。ルネ・マグリット。ダリと比べると、やや、技術的に

は劣るようにも見えるけれど、テーマが騙し絵的で分かり易い。私はとても好きである。それと、いつも同じ時間に絵を描いて、同じ時間に犬の散歩。住人が時計代わりにしていたエピソードが素敵過ぎるのだ。この淡々とした感じがなんとも素敵である。キリコ、デルボーも忘れられない画家たちである。

雨の日曜日に。

2016.02.21 Sun

フリージャズの基本要素は、エモーショナルな叫び、コード進行の無視、要は、自分の感じたことを、そのまま音にする。でも、正直、相当な技術がいる。ライブ即興演奏。やはり、色々と考えれば、これは相当な精神力と技術がいる。フリージャズ的人間について考えてみた。画家の世界では、ずばり、ゴッホである。フリージャズ、そのものとも言える。文学の世界では、ヘンリ・ミラーだ。「俺は俺の書いたものを一切推敲しない」、これは、ずばりフリージャズである。そして、私の母国日本に、その極北へ旅立った男がいる。阿部薫だ。沖至師匠が新宿に連れて行った。そういう意味で、私の先輩である。たぶん、私も同じような気質があったのだろう。沖師匠は、そういうものを見抜く天才である。と言っても、私が阿部さんを超える事は永遠にない。五十代のおっさんには、無理。阿部さんはフリージャズのブルース・リー。無理である。

美術家として、私はゴッホの影響を一切受けていない。実に不思議な現象だと思う。音楽の世界では、影響を乗り越えて、音のバン・ゴッホと化す。これは、自分でも謎なのだ。

エモーション、絵画のルール無視、自分の感じるままに……。どうしてなのだろう、音楽の世界で、私はゴッホに肉薄しようとしている。

おりゃ、なんか最近、美術のことばかり書いている。これも、自分で分からない。昨日、セザンヌについて書いた。彼が描いた水車小屋が私の家の、ほとんど真下にある。ゴッホ晩年のオーベエーニュ村は歩いて行ける距離だ。昨晚、キンビール提供「美の巨人たち」を見た。酒ばかり飲んでる私も少し、この番組に協力しているのだ。酒代がこういう番組に変わる。本望である。

ゴッホの代表作「オーベエーニュ教会」、知らなかった。上部が夜で下部が昼。上部が見上げる遠近法、下部が眼下の遠近法。そして、フランスにはいないオランダの農婦が左端に描かれている。ゴッホのことを認めようとしなかった父親に対する凱旋的な絵であるという分析。こういう分析は実におもしろい。本当なのか？ そんなことはどうでもいいのだ。分析して、「自分の生きる糧」にする。そこに、芸術の醍醐味があるのである。

唐突に、我が息子が登場する動画を添付する。意味？ 芸術的な？ わっ、単なる親馬鹿なのだ。おっさんになると、芸術さえ乗り越えるのだ。寂しいねえー。ごほん、文句あんのかって？ 大音響で聴いてね。元気印だぜって、マイ・フレンド。

明日はコンサート。初出演になる。どういうコンセプトでいこうか、諸々考える振りだけで、現場にいけば、後はへめらもなのだ。ヤマハのピアノがあることは知っているし、調律もされている。十分である。ドラムセットがロック用。真師匠のセッティングに時間が掛かるだろう。気になるのはそれだけである。音のバン・ゴッホ、このポリシーで十分である。

「美の巨人たち」、わっ、とうとう、ダ・ビンチを見てしまった。もし、彼を「芸術家の原基」とすると、ぎょわあーん、私だけではなく、数多の人々がやばくなる。凄過ぎ。ダ・ビンチの別の番組も見た。山口智子さんが案内役。美人じゃないけど、なんともカワイイのだ彼女。好みなの？ ううーん、うん。

コンサート前夜は脳ハイになる。高年の紅葉から高揚へ。ミュージッチャン冥利である。

しかし、である。名称は全部忘れたけれど、ダ・ビンチのフィレンチェの戦いを描いた巨大壁画が、バザレリだったけっな？ の壁画後ろの二センチ半のところに存在しているらしい。というか元々存在していた。それが、たぶん、「そのまま残っている」らしい。もう、謎々の世界である。こういうところがダ・ビンチのすさまじいパワー。唯一、近代で分析意欲を掻き立てるのはデュシャンの通称「大ガラス」だけである。やはり、芸術で食っている人、食えない人、自称芸術家、芸術家もどき、わっ、最後のは俺だっ！ 少なくとも、こういう範疇の人々は、改めて、こういう超巨人を再考するべきであろう。私なんぞ、ゴミ以下である。

おっ、なんかのついでにユウミリさんと読むんだよね？ 芥川賞作家の売れっ子だと思っていた。もちろん、そうなのだけれど、彼女のエッセイ集、確か「貧乏日記」とかいう本が出たと出ていた。要は、小説で食べて行けない。光熱費が払えないという現況を書いた本らしい。

わあおおーん、彼女がそうならば、私が食えないのは、あまりに当然である。才能ある方。しかも、世間に作家認知されている、のに、食えない。もう、芸術バブルの終焉なのだね、本当に。

ほっほほほおー、元々、そういうものだから、元に戻ったわけね。そして、たぶん、インターネットと商業主義の狭間のアンダーグラウンドから、すばらしいものが出てくるはずである。と、手前味噌ではなくて、なんとなく、私も少し安心したし、そうこなくっちゃ、とも思った。

わっ、といいつつ、ダ・ビンチなあー。自己表現なんちゅうレベルがマイクロコスモスになっちゃう。自我なんて、本当にいるの？

2016.02.24 Wed

デビュー

今、タイトルを付けた。おっ、考えたらフランス語だった、この日本語。でね、先日、黒猫ちゅうライブハウスに初出演した。行った、着いた、雰囲気ジャズじゃね。今晚の演奏のコンセプトが脳内で二秒ぐらい渦巻く。佐藤真師匠のドラムセッティングをする。私は、どら息子なのにドラムのことは分からないというオジギャグはさておき、真師匠、わっ、いいドラムじゃん。私のピアノ、ヤマハの一番安いやつ。バビロの逆パターンかよおー。しかし、真師匠のドラミング音量で調整する意外にはなし。しかし、若者が多い。地上階のカフェは一杯。わあおおー、これってよ、ジャズロックだよねえー、となった。しかし、機材がない。うだば、アコースティックでやるべ。息子娘軍団が聴きに来る。ますます、ジャズロックベクトル。と、結局、和洋折衷。メロディックフリージャズロック。結局、芸術と芸能の狭間で飛んだっ、我々はっ！ でね、寒波の中でカンパリソーダの心が解れた。「うな、羽毛おー、楽しいことやろうぜえー、どうせ、暇だし、ピアノ弾いてブログ書いて小説、うん、楽しい、自分が楽しい小説な、読者ゼロなんて関係ねえー、だって、自分が一番楽しんでいるから、いいのだそれでえー」とか、本気で思ったちゃったあー、うで、今朝、シンセサイザーをサロンに設置した。そう、四月にリベンジするのだ。あの若僧どもの溢れる、あの空気に……。おっと、真師匠は上機嫌で、バー
ウーマンたちを口説き捲くっていたっ！ こういうのって、やっぱ、「デビュー」といっていいと思えるのである。

2016.02.28 Sun

ピアノとシンセサイザー

これは私見ではなく、一般論とするとピアノとシンセサイザー、芸術と芸能、文学と読物、同じことだけれど純文学と大衆文学みたいな関係になるのかも知れない。なんとなく、前者の方が格上のような感じになる。私個人はどちらでも構わない。格上格下というランキングの必要はなく、単に違うものということ。とはいえ、たとえば、私は小説モドキを書くのだけれど、ジャンルとすると私はどちらも書く。でも、私の内部でなんとなく「やはり、重いテーマをきちんと書かなければいけない」と元文学青年の思い込みが正直ある。だから、お笑いショートショートなんか書いている時は、本人が一番楽しんでいるし、自分の原稿を読んでゲラゲラ笑う。健康には絶対にいいし、慢性鬱がどこかへ吹っ飛ぶ。しかし、いかんなあー、こういうくだらんことばかり書いてはとか脳の片隅で考えている。金子光晴の晩年の三部作、森敦の月山、深沢七郎の笛吹川なんか脳内で蠢く。慢性鬱がぶり返す。そして、気を引き締めて書き出す。全然楽しくない。たぶん、私は高年性恒常的幸福感症候群と自分で名付けたのだけれど、この状態にあるから、体が耐えられないのだ。酒をがぶがぶ飲んで、泣きながら書いたりするのだけれど、ある一線を越えると急に笑い出すのだ。うなもんおーん、どうでもええべって。どうせぬげんはつちにかえるだけだべ、うなもん、ぎょうぎょうすく、おれがかいてなんぼのもんだべ、とかなる。

先日の黒猫でのコンサートは私にとって実に示唆に富んでいた。たとえば、私が孤高の芸術家であるとする。この場合は、会場のいかなる空気にも一切動揺せず自分の音楽をやる。理解してくれる方のみ好んでくれればよし、とこうならなければならない。しかし、実際の裕イサオ君は、バーのおねえちゃんにでれでれし、出入りするカワイ子ちゃんを目で追い、わあおおーん、失敗いーん、シンセサイザーで格好いい感じいーんにすたかったなおれえーと、ものの二秒でなっている。ここで、踏ん張り、「我々は、なにごとにも動揺せず、我々の音楽を貫き通す、以上っ」とバンドマスターはメンバーに指示を出すはずなのに、真師匠の目はすでにタレ目であるし、オリビアは「あら、エレクトリックベース持ってくればよかったわね」なんていっている。どうしても、この空気をぶち壊すなあーんての、皆、しんどい。共有し共鳴してお客様共々皆で楽しみたいとこれまた二秒でなった。

結論として、自然体が一番楽しいし、駱駝。そして、先輩たちから裕イサオ君は墮落したと叱責されるのであるが、デヘヘー目のまま、林家三平する。おりゃ、思い出した。一冊だけ上梓された私の自伝的散文詩的小説。芥川賞作家お二人から「次回作に期待する」というお手紙まで頂いているのに、その次回作が、お笑いショートショート集。出版社から、「あの一、前作の、あの一、正当な手法で書いて頂けませんか？」といわれたのである。私の脳はその時すでにジャズ菌に侵されていた。結局、編集者はいかりや長介。見放されたのである文学の世界から。

おっほほほおー、難のこれ式。やはり、高年で無理は禁物。自分で楽しいことしかやら
んっ！ となんとなく、先日のコンサートで思い知った気がする。昨日、シンセサイザーに六つ
のパターンをプログラミングした。そしたら、お笑いショートショートがむらむらと脳内に沸き
上

がってきたし、むらむらとブログりたくなった。

2016.02.29 Mon

と、タイトルのような人生があるのか？ あるようなないような。結局、本人次第。何度も、大師匠に登場願うのだけれど、マルセル・デュシャンの女装した写真の名前は、「ローズ・セラビー」であることは周知の事実。自分に「バラ色人生」なんて付けちゃうから頭が上がらない。では、わたくしのそれは？ ふう——む、かなり近いのだ。それに。

たとえば、ぐわっと、九日間仕事仕事。ドライバーの方ね。小休止、コンサート、二日酔い、仕事、音楽関係の方の仕事というかプロモートとプランニング、そして、またまた、ドライバー。急がしいのか暇なのか？ でも、会社員じゃないから、全然、同僚っても、私の周りにはだれもいない。このドライバーという仕事。なんとなく、最初の頃、昔取ったキネヅカ、あれっ、そういう日本語あったよなあー、つまり、元某日系企業のえらいさん。これが抜けなかった。自分でもおもしろいのは、その人の上に立とうとする時にジャズメンだっ！ これが出てこない。昔のえらいさんの方で自負を支えようとする。まあ、そういう人たちと接しているから、そうなるのだろう。同じ会社を去って行ったドライバーたちの最大の悪いパターン。「僕はこう見えても芸術家なのです」。これをあからさまにお客様にいつてしまう接客業失格馬鹿。芸術家を画家でも、音楽家でも小説家でもなんでもいいのだけれど、それをお客様へいう。はっきりいつてドライバーへ失礼である。なんかよおー、蔑んでんのかよっ、ばあーたれと申し上げる。自分でやっているのにそういうことをいう。負け犬の遠吠えだぜってっ！ まあ、俺も、ちょっとはあった、そういう気持ち。でも、今は・・・。

俺はベンツのSクラスの中にいる。高級レストランの近くで待機しているのだ。自分で作った缶詰サバ煮のり梅干夢錦弁当を車内で、ジャズを聴きながら食べる。うまい。食べ終わり玉割ゲームをする。お客様が、もし、お疲れであれば出てくるであろう最短時間の十五分前にレストランの前に行く。一時間以上待つ。その間、レストラン内部の諸々の人々を見る。水族館みたい。おもしろい。どこが惨めなのだろう。上司も同僚もいない。この充実した孤独。すばらしい。本当に食えないジャズメンにぴったりだと思う。夜のパリに私は優しく包まれちゃったりしているのである。私は確信している、ランボーも絶対に、この仕事を気に入るであろうと。詩の本質は、世間を斜めに見ることではない。外部から見ることなのである。ドライバー、この自我の消滅した仕事。素敵過ぎる。フロントガラスから世界を見ている。

2016.03.01 Tue

リムジーンドライバー

以前書いた内容と少し重複するけれど、このタイトルで記事を書いたことはない。日本に同じような仕事があるのかよく分からないけれど、当然、あると推測する。ハイヤーとはちょっと違う。プライベートドライバーといういい方が正解だから、たとえば、会社の社長車のドライバーが当て嵌まる。とすると私がやっている仕事は、期間限定プライベートドライバーということになる。車は一般的にフランスではベンツのSクラス黒。本来はシトロエンC6。製造中止になってしまった。二年前ぐらいまで、健康診断書を持って最寄の県庁に行けば、業務用プロライセンスをだれでも取得できた。タクシー協会が爆発した。それでなくても増え過ぎたリムジーンドライバーの法の網を潜ってウーバー社がゲリラ営業を開始したからである。当初はプロライセンスのないドライバーが自家用車営業。これは、さすがに営業停止。こんどは、価格破壊。車も中型高級車。本当はリムジーンとは呼ばない車を使用。タクシーの半額を開始した。とうとうタクシードライバーたちが切れた。当然だろう。法律が変わる。政府指定の学校に二ヶ月通うことが義務付けられた。これには、もう一つ理由がある。年長のベテランリムジーンドライバーたちの嘆き。我々は複数の外国語を話し、フランスの地理歴史文化に精通し、走る五つ星ホテルの従業員のようなものなのだというプライドが、この乱造で破壊されたと感じているからなのだ。彼らはパリの文化史の一部であるというプライドがつよい。学校の授業内容が、年長のリムジーンドライバーの嘆きをそのまま現している。たぶん、私が学校卒日本人ドライバー第一号のはずである。

ドライバーの方がこの記事を読むと、カチンとなると思うけれど、私自身がそうだからご容赦願う。

フランス政府がサルコジ大統領の時、溢れる失業者対策の一つとして、リムジーンドライバーの増量を始めた。その気になれば、一般職より高給が取れると志願者が殺到。無条件で許可。当然、年長のリムジーンドライバーが首を傾げるようなクオリティダウンが始まった。その流れで、ステイタス自体が消滅し始めてきた。なんか、ドライバー＝元失業者のようなイメージが定着。

乗っている車は中型とはいえ高級車。ベンツ、ビーエム・・・。高給を掴もうとぎらつく、現況ではまずしいドライバー。後席のお金持ち。鳥瞰すると、社会格差、惨めとか負け犬の構図になってしまう。年長のドライバーの自我を消し去ったプロの接客業。彼らのプロ意識とプライドは半端ではないから、もちろん、彼らに惨め感など毛頭ないのである。あらゆる話題に対応する話術。芸術、芸能、料理、ワイン、スポーツ、時事と半端ではないのだ彼らは。乗っている車はいつもピカピカ。着こなしも実にエレガント。十人に一人ぐらいの割合で見掛ける。同業者なのだけれど、私が見ても、わっ、ありゃ、本物のプロだっ！ と一目で分かる。その周りに乱造組み。安物スーツが皺くちゃ。サングラス。唾を吐き、煙草煙草煙草・・・、ポイ捨て、ポケッ

トに手を突っ込んだまま接客、きたない車。私個人は、これはこれでなんか粹な感じもする。更生した元悪感、こちらジャズメンだから似たようなものなのだ。しかし、年長ベテランリムジーンドライバーが老眼鏡ごしに嘆いているだろうことは明白でもある。

私自身は、もちろん、後者にならなければならないのだけれど、どちらにも属していないドライバー群に当て嵌まる。そう、「本業で食べて行けない人たち」。しかし、こちらクレーム率が高い。先日書いた。「僕はこうみえても症候群」、これが最大のネックになる。気持ちは分かるのだけれど、ドライバー業をしているにも関わらず、自分でそれを蔑んでいる。こういう意識は馬鹿だし、実にドライバーに失礼だし、お前こそ何様なの？ となる。同じ会社を解雇された一人。「お客さん、僕はこんな仕事をしていますが、実は、小説家でしてねえー」。会社にクレーム。「我々は小説家を送ってくれとは御社にお願いして居りません」。たとえば、私もよく履歴を聞かれる。「どうしてパリへ、フランスへ？」「はい、絵描きで一旗揚げようと参ったのですが、揚がったことは揚がったのですが、それは白旗だったんです」。お客様、「アッはははハア————、大変だもんねえー、芸術で食って行くのはねえ————、アッははははははははははハア————」。「運転手さん、セラビっていうフランス語さ、やったぜって意味だよな？」「私の周りでは、その使い方、聞いたことないですね。社長と住んでいる世界が違うからかも知れませんが、我々が使うと、人生こんなもんだよねえー、しょうがないよねえー、でも、元気に行きましょう、みたいな肯定的諦めっていう感じです」「わっ、そうなんだ。俺、真逆で理解してたかもな」「社長、ドライバーの私がいうと哀愁が漂いませんか？」「えっ、あっ、アッハハはははハア、運転手さん、あなたおもしろいねえー」。

私自身は、即興演奏のようなその日暮らし。お客様の人命をお預かりしている重責を除くと、ほとんど責任のない世界。もちろん、諸々のスキルはあるけれど……。なんか、ジャズしてるなあーと感じる。食えないジャズメンにあまりにぴったりしていて、楽しくてしょうがないのだ。ドキュメンタリーに出演したいぐらいである。そして、私がもっとも気に入っていること。あははははあー、運転席のサンテグジュペリだということ。そう、星の王子様の作者です。彼はご存知の通りカーゴフライトのパイロットだった。文字通り鳥瞰目線。リムジーンドライバー目線もあるのだぞ。

2016.03.03 Thu

なんとなく半分寝ながらプールで泳いでいるような感じがした。右側の妻が突然しくやみをした。四分の三、目が覚めた。私と妻はベッドから1 mぐらいのところに浮かんでいた。

無意識と意識の狭間で、私はプールから出ようとしたら、ベッドマットの上に静かに落下した。そのまま、熟睡した。

翌朝、なんとなく浮遊していたような夢を見たような見なかったような気がした。

二週間ぐらいが経ったのだろう。私は早朝の仕事を終え、昼寝というより二度寝をした。なんとなくプールでクロールをしている感じがした。四分の三、目が覚めた。なぜか、天井がすぐ目の前に見えた。ということは、3 mぐらい浮かんでいたことになるのだろうけれど、その後、熟睡した。

それから、二十年ぐらいが過ぎた今、急に「その感覚」が蘇ってきた。「正夢感」である。私は、ベッドに横になり、なんとなく、自我のない固体がプールの水面に浮かんでいる感が込み上げて来る。目覚めたまま、私の体が持ち上がり、天井に張り付いた。

なぜ、私は私の「この能力」に二十年前、気が付かなかったのだろう？ 「夢」と「思い込んでいた」のだろう。

しかし、そうではなかった。

2016.03.05 Sat

昨晚というのか今朝というのか、午前零時過ぎに帰宅。三十分、ぼーとビール。寝る。午前三時十五分、起床。ほとんど寝ていない。仕事。ガレージで車の掃除を終了したのが、午前七時。普通なら、八時半には家に着いている。本格的二度寝の予定。地下鉄、郊外線、最寄り駅、下りる。電車がな。また、地下鉄に乗り、サンラザール駅へ。ホームを出る電車の後姿に紙テープ。疲労タイタニック。次の電車、二時間後・・・。そう、フランス名物、国鉄ストなのだ。寒波、曇の中。こちらは、ほとんど寝ていない。倒れそうになる。急に顔がダニエル・クレイグになる。不思議な笑い方。一昨日、カバンの取っ手に結んでいた折り畳み傘をどこかで落としている。こういうチョンボは滅多にしないけれど、やはり、疲れている。道筋を戻る。当然、拾われて、持って行かれている。フランスで、一旦、体から離れたものが戻ることはないのだ。カミサンもね。そうすると、算数的乗り継ぎ帰宅になる。段々、雨土砂降り。帰宅駅からの道筋を考えると、その合間にどこかで傘を買わなければならない。コンビニなんちゅうものはない。早朝、開いている店もない。どこで調達するのか？ しかも、安物買いのなんとかで、フランスの安傘は三回差すとアウト。私は嫌いなのだ、こういうのは。多少、高くても、何年か持つものを買いたい。算数的乗換えの合間に、開いているスーパーを見付ける。「雨と共に生きる」という赤いロゴの入った傘を購入。赤い文字のデザインが女性的でちょっと気になる。おかまに間違えられるし口説かれる可能性が高まる。おかまに他意はないけれど、こちらは寝ていないから女性でさえしんどいのに・・・。しかし、傘はとてもいい出来。気に入る。と、駅に着いて、土砂降りの中買い物して帰宅して一時間半寝て昼食風呂ピアノブログ料理と俺はピカソかよおーと思いつつこの異常な高年エネルギーはなんなのだあーとも思うけれど来週のコンサート大先輩三人に羽交い絞めやばいから練習せんといかんのだうで海鮮カレーを食べてトゥルルさまーず見て寝るのだけれどあびるはなんか諸フランス女してしいる。同性の好感度は低いだろうけれど俺は好きだなこういう感じ自由感と銜がないいいナオンだ、ジャズってる彼女。大竹さんと三村さんはタレ目涙目でいつも見ている。大ファンである。

2016.03.09 Wed

「Next Phase」

タイトルを括弧付けしたのは、ワールドオーダーの曲名だからである。昨晚、久しぶりに彼らのチャンネルを覗いた。当然にして素朴な疑問。「あれっ、工藤さんは？」。インターネットで理由を調べた。彼は本当にすごい人だ。この決断力は半端ではないと思う。潔さの極致。格闘家の歴史の重みも感じる。「引退の時期」という宿命を。

タイトルを私なりに訳してみると「次の局面」という感じかな、と思う。当然にして、私が今日、記事を書く意味を問われる。

一日中、震災のことを考えていた。五年という月日のことも……。そもそも、私が高年プーターローと化したのも震災なのである。フランスの日系企業の重責というポスト。私の二十四年間で問われた。お前、そんなことしにフランスに来たの？ 当然、ノンである。震災が私に問い掛ける。心の復興はないと。一度折れたものは元には戻らない。そうであれば、私自身、私の責任は私。少なくとも、「これだけ」でも復興しないといけないと思い始めた。社会的な地位、そこそこの高給。これを、お前の年で失うのか？ 正直、こわい。しかし、今しなければ、いつ、お前は戻れるのだ、初心に、とも同時に思った。そして、戻る。赤貧と引き換えに自由な時間ができた。時間ができたのならば、次の局面は自由についての考察だろう。単に時間がある。そうではないだろう、時間があることと自由は別のもの。

お前は何をしたいのだ？ 十四歳の時の答え。ジャズピアニスト。以上だろう。

還暦が近い男がまだつっぱる糞真面目ともいえるしかしこの気骨反骨が折れた時こそ私の終焉なのだと思う脳死なのだこれだけは避けたいとつっぱるそして多忙余生を自分で構築する美術詩小説ブログジャズすべてをやっちまえと思う始めなければ次の局面はこないのは当然である異常なピカソ的エネルギーはなんなのと自分で思う上から目線なんていうセコイはなしではないのだ少なくとも私自身が復興しないといけないとしみじみと思うそれはないからこそそうしないといけない世間という謎の物体と乖離するしかないのだろうなと思うそんなものに関わる時間はないのだ。

そして、三月十一日は息子の誕生日なのだ。この引き裂かれた状態が、たぶん、私の宿命なのだろう。

2016.03.11 Fri

本当に偶然なのだけれど、この記事というのか、私のブログの総あとがきが公開記事1, 000番目。削除したものの未発表分を入れると1, 200ぐらいのはずだ。前回の記事で、これまた、ぴったり三年半が経過している。この筆力に自分で驚く。この記事を含めて、電子書籍にする。これで、私のブログは開店したまま閉鎖とすることにした。そのまま放置することにした。なんかの切っ掛けで読んで頂けるならば幸いです。ブログ村も、そのままにする。本当に僭越なのだけれど、ブログ村は私は大好きだし、エッセイ部門も、ほとんど愛している。600人強の参加者の方がいる。とりわけ、お若い方々の目に、私の愚ブログが目にとまってほしいという感じがある。ユニークとか異色とか、えっ、くだらねえーとか色々のリアクションが沸き起これば、それはそれでおもしろい。還暦の近い親父のブログなのだ。こういうベクトルもあるという反面教師になれば幸甚です。ブログは、本当に楽しかった。諸々の物を書くという可能性の考察、および、書く訓練になった。そして、私の根源的な何物かに、その訓練が抵触し始めた。そうになると、書く場所としての違和感が酷くなってきた。もう、諸に書いてしまう。まあ、まだ長い長い人生。ピアノと料理と草筆りだけでは、埋め切れない。リムジーンドライバーやっても埋まらない。そうになると、強力な助っ人というのか、暇潰しの極北、「文学」というおそろしい世界の探検探索散歩破壊再構築というむらむらむらあーとした野心が込み上げて来たのである。三振空振りであっても構わない。そう、打席にだけでも立っただろうと思った。すでに、サハラ砂漠のど真ん中で、小説と敢えていうのだけれど、十一作目の執筆を開始した。このベースに私のブログがある。小説ではなくて、私は、文学に肉薄しようと若い時分に試みていた。嫌気が差し、十年間、会社のメールと私信以外はなにも書かなかった。こういう男に、再度、そう、復帰力をブログがもたらしてくれた。これはすごい。そして、もちろん、これからも拝読は続けるのだけれど、その、私のブログの支えになって下さった右下のすばらしいブロガーさんたちへ、謹んで御礼申し上げます。健筆、よろしくっ！ 私は一番の愛読者の一人を自負して居ります。再度のお辞儀です。皆さん、お元気でっ！ 「次の局面」というワールドオーダー工藤元気には参った。本当にいかした野郎だ、彼は。

ありがとうございました。

私の文学の一つの転機と終焉は、近代文芸社「水の記憶」和田光孝著。1, 996年上梓。吉野せい文学賞候補作。この二十年前の自伝散文詩形の小説なのだ。期待されたはずのその2を書き始めた。「One day in France」というタイトルで。

2016.03.13 Sun